

NO. 47
AUTUMN
1974

英語展望

ELEC BULLETIN

特集：身ぶり言語

身ぶり言語 — 日英比較 小林祐子／身ぶり、しぐさ 西山千／在米日本人と身ぶり言語 今村茂男／身振り 国広哲弥／ジェスチュアの調べかた 中野道雄



英語展望

NO. 47
AUTUMN
1974

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc., Tokyo



【国際展望】

ウォーターゲートおわる.....	國弘正雄	2
本格化する国際適応訓練.....	金山宣夫	4
ドーヴァー海峡.....	宮本昭三郎	6
Learning Language.....	Gregory Clark	8

【特集】 身ぶり言語

身ぶり言語一日英比較.....	小林祐子	11
身ぶり、しぐさ.....	西山千	17
在米日本人と身ぶり言語.....	今村茂男	19
身振り.....	國廣哲彌	21
ジェスチュアの調べかた.....	中野道雄	23
基礎語彙について(2).....	服部四郎	25
叙実述語 (Factive Predicate)	太田朗	31
英語になった日本語(3).....	長谷川潔	34
外国语としての日本語教育.....	九鬼博	38
No Side!	P. P. P.	42

【新刊書評】

『なんで英語やるの?』.....	山本庄三郎	44
『マザー・グースの世界』.....	國弘正雄	46
新刊紹介.....		47
展望通信.....		48

ウォーターゲートおわる

KUNIHIRO MASAO

國 弘 正 雄

ニクソンが退いた。よもやと思った日本人が多かったらしいにもかかわらずである。

らしい、と書いたのにはわけがある。アメリカに詳しい苦の国際派の政財界人の少なからずが、そういう口吻を洩らしていたからである。専門のアメリカ研究者にも、同様のおどろきを示す向きがあったという。かれをのせたヘリコプターが、ホワイトハウスの南庭を飛び立ち、西の方に一点となって消えたとき、ニクソンは退いた。歴史は変わったのである。

あの大政変を通じ、クーデターの臭いがさらにならなかったのは、幸いであった。アメリカのもつ基本的な健全さの、それは何よりのあらわれであった。権能を一身に集めた世界最強のトップリーダーが、とにもかくにも一定の手続に従って、穏便に退いていった。ただの一兵も動く気配とてなかった。いや、その怖れの片鱗だに、だれの脳裏をもかすめなかつた。

ぼくはこの2年足らず、執拗なまでにウォーターゲートを追ってきた。一昨年11月の大統領選挙のときも前日までアメリカにいた。ぼくはマクガヴァンに肩入れしていた。すでにかれの劣勢はおおいがたかったが、それでもニクソンのもつ、まがまがしさを知りあいのだれかに説き、奇蹟をねがつた。68年にハンフリー氏を惜敗させたアメリカ人に二度のあやまちをおかして欲しくなかつた。6月中旬の民主党本部侵入事件のいまわしさが噂されている以上、それを投票行動にあらわさないのは、アメリカ人としておかしいのではないか、と彼らのフェアーブレイ感覚にも訴えた。でも、マクガヴァンはアメリカ史上最大の敗北を喫した。ニクソンの地すべり的大勝を耳にしたのは、羽田に降り立つと同時にあった。悼みの念とともにであった。

すでに、サンフランシスコのアングラ新聞や雑誌は、ニクソン一流の汚ない手口を逐一報じていた。いまにして思えば、驚くほどの正確さで、である。ぼくはあの街に遊ぶと、学生時代を思い出しては、アングラ街——ヒッピーのかつての全米的なまり場だった——に足を向ける。そこには、よそではお目にかかるぬような刊行物

が、ところ狭しとおかれている。それを買い漁るのはぼくの桑港でのきまつた日程である。東部のエスタブリッシュメントや、respectableな市民や、学者先生の「こちたきさかしら」の手から漏る、先行指標的なアメリカのうごめきや息吹きが、ほの感じられるからである。地下のうす暗いつらあかりのもとで目を通すこれらの書きものを無視して、アメリカの未来はトせない。

ベトナム戦はまだ終つてはいなかった。大学紛争もまだくすぶつっていた。アングラ新聞は、Pigs(ボリ公)という特大の活字を一面に掲げていた。警官隊とカリフォルニア大学生の衝突が報ぜられた直後のことだった。

これらの刊行物は、ニクソンの手口を批判し、罵倒していた。(0年にケネディ陣営が用いた「あなたはあの男から中古車を買う気になりますか」という痛烈なニクソン批判も顔を出していた。Tricky DickとかDirty Dickという、ニクソンとは不可分の仇名も、あちこちに見られた。盜聴事件や政治献金をめぐる黒い噂、さらには7月の司法長官辞任の真相などをゴシックの太字で書き立てていた。そしてすでに述べたとおり、いまにしてこれらの記事は、大綱においてまことに正確であった。

ぼくはすでにNHK中級会話テクストに「ニクソン氏の横顔」を書いていた。これはぼくが直接会ったことのある東西有名人のプロフィールを月に一度ずつ連載するものだった。(このところ紙不足で中断していたが、来月号から復活する。視聴者の手厚い要望に応えたものだが、復活第一弾には、この1月10日に会ったフォード新大統領をとり扱う。)ニクソンには副大統領時代と、知事選にも敗れて野に在った失意の時代に数回会ったことがある。そのときの印象とぼくのbias——あえてこう呼ぼう——とをないまぜにして書いた。一緒にとった写真も掲げたが、2人とも驚くほど若い。63年ごろのことだ。かれは史上最年少の副大統領の1人だったのである。

日本に帰るほどなく、民主党本部侵入の詳細が徐々に明らかになる。アングラ新聞の報じていたとおりの仕儀であった。2月上旬には上院に特別調査委員会が設置された。

5月に折を得て1週間のアメリカ旅行を、タイム誌の企画で行なったときには、全米はすでにこの事件でもち切りだった。会う人ごとにぼくは意見を求め、かつ求められた。ハンフリー氏がワシントンの会合で熱弁をふるい、ふだん政治を小馬鹿にしている広告屋や弁護士どもが、政治家には考えられぬほど陋劣な手段を弄した点を鋭く指摘したのが感動的だった。そのあと、タイム社の創設者の子息で現職の同社役員が、ほとんど涙を流さんばかりに、なぜわれわれはかれを捨ててニクソンを選んだのか、とくやんでいたのも忘れられない。その顔は苦痛と後悔とに呆け、ゆがんでいた。有力な共和党員のかれがである。

帰ってきてぼくは、毎日新聞関係のある月刊誌にかなり詳しいレポートを書いた。本誌の73年夏季号に「現地に見るウォーターゲート」を、同年の秋季号には「ウォーターゲートをめぐって」を寄せた。本稿はいわばその終結総集篇である。

10月と11月にまたアメリカに行った。10月のときは、日本の高名な知識人たちと一緒にいたが、テレビは毎日のように議会での証言を伝えていた。会議や所用以外の時間はすべてテレビの前で過した。目の前に展開するのは一つの巨大な人間のドラマであり、歴史の経過であった。歴史の中に在る思いをこれほど強烈に感じさせられたことは、たえて久しくなかった。権勢をきわめただれかれが出ては消えていった。おそらくは政治史の一頁から永遠に、である。人間の運命かくのごときか、という感傷がふとぼくを襲った。そしていまも、である。恐らくはあのヘリコプターの姿を見たいまとなっては、より鮮烈にである。

その頃からぼくはニクソンの退陣必至を疑わないようになった。そういう趣旨を口にし筆にした。11月に外交問題評議会 (Council on Foreign Relations) 主催の日本セミナーに講師として出席、ライシャワー教授、ブレジンスキー教授、安川駐米大使らと同じパネルで出席者の質疑に応じた際も、この一大事件をとことんまで摘発できるアメリカの三権分立——マスコミの investigative reporting の伝統を含め四権分立といつてもよい——の強靱さと、その衝撃に耐えうるであろうあの国の人したたかな力強さを、むしろ羨しく思う旨を述べた。そのときに彼らの表情に流れた安堵感はいまもある種の愛しさとともにぼくの記憶にある。すでにニクソン内閣の前有力閣僚の2人は、大陪審で手きびしい追求を受けていた。

ニクソンの命運が尽きたという思いは、ことしの1月

上旬、ホワイトハウスのすぐとなりの副大統領執務室で、フォード副大統領（当時）に小1時間ほど会ったときにさらに強められた。「2人の兄弟があった。1人は船乗りに、他の1人は合衆国副大統領になった。その後2人の消息をたえて聞かない」というワシントン小話が示すように、このポストは「もっとも無意味な要職」といわれてきた。でもこの中西部出身の元フットボール選手はちがっていた。外交問題に昏いという世評を打ち消そうとしてか、中国旅行の思い出を一しきり語り、中国の地名や人名を次から次へと出してきた。メモも見ずにあった。アラブ問題をめぐる国連の動き——その過去の経緯を含めて——についても、技術的な詳細にいたるまで論じていた。キッシンジャー長官への信頼も一再ならず口にした。来るべき重責に備えて特訓中という思いが、快よかった。その旨を、ニクソンの命運は尽きたという判断とともに書いたのは、『アジア時報』の6月号、記念においてきた英文論文集、*Discord in the Pacific* を読んだ旨の礼状が、1セント切手を山ほど貼った船便でとどいた日に物した一文だった。赤ら顔で肩巾はあくまでも広く、武骨とすらいえるかれにふさわしいとして、ぼくはその船便を嘉した。

ニクソンは退いた。かれのあげた外交面での一応の成果にもかかわらず、アメリカ国民は、むしろ民主主義の大原則の擁護に賭けた。より具体的には、三権分立および抑制と均衡 (checks and balances)，それに何人も法の支配の上にあるべきでない，とする大原則にである。恐らくは血の涙を流しつつも、大多数のアメリカ人がかれの成果にはあえて目をつむった。

2百年前に、その大原則の実践の場として人為的な国造りをした建国の父祖たちの末は、いまでもその大原則を自らを映す鏡としている。その鏡はことあるごとに動員され、その鏡にてらして自らの現状を反省する。もとよりその姿は、往々にして醜くデフォルメされ、鏡自体がくもりに曇ることも一再にとどまらなかった。が、一事有事の際にはたえずその鏡に自らの姿を映すことをためらわなかつた。この度の事件とアメリカ人の反応はまさにこれであった。もし日本の有識者が、ニクソンの業績の故に、そして何よりも大統領というポストの重みの故に、よもやかれの退陣などありえぬと速断していたとすれば、あの國のもつ根源的な意味を捕捉しそくなつていたといふうのであろう。

彼我の差の重要な一つをぼくはここにみる。ある理念の具体化の場として人為的に作られた国と、自然発生的

(p. 10 へつづく)

本格化する国際適応訓練

KANAYAMA NOBUO

金山宣夫

☆日本の中の日本人租界

明治以来の「追いつき追い越せ」から今日の「国際化への対処」に至る1億総ぐるみのかけ声の中で、日本人が多大の時間と費用をかけながら、納得のいく成果を上げられなかつた活動領域の1つが語学教育であることは、大方の認めるところであろう。日本人が日本語という独自の言語を持ったことは、日本社会の均質性を維持する上で大きな力となっている。その均質社会で行なわれる外国語教育には、最初から1つの限界があったと見ることができる。

すなわち、語学は「追いつき追い越せ」の手段ないしは方便であり、近代化・工業化に必要な技術や制度を外国から導入するのに役立ちさえすればよいと考えられたわけである。日本における英語教育の欠陥として、「シェイクスピアが読めても、日常会話がろくにできない」という指摘される。その事実は、おそらく英語教育の失敗よりも成功を物語るものというべきではなかろうか。なぜならば、日本の英語教育はそのような一面性を枠組として考えるかぎり効果的なものであり、その一面性によって、外国の技術・制度の導入が可能になったと評価できるからである。

今日やかましくいわれる「国際化への対処」についても、似たり寄ったりのことがいえる。日本人にとって「国際化への対処」とは、第一義的に「経済大国」を維持しさらに膨張させるために直面させられている挑戦にはかならない。企業内教育で語学に力こぶが入れられているのも、ひとえにそのためである。

逆にいようと、語学などしなくとも「経済大国」の地位が安泰なのであれば、「国際化への対処」が国民的なスローガンになることはなかっただろう。

「追いつき追い越せ」にせよ「国際化への対処」にせよ、そのいずれの下においても、語学教育は限界と一面性を持っている。言語が文化の所産であることは誰でも知っている。しかし、日本の語学教育においては、外国語は常に外国文化から切り離して扱われてきた。語学はあくまでも手段であり、それを通じて均質社会の異文化

との接触が促されたわけではない。

そこには「和魂洋才」に共通するあの不可思議にも巧みな方式が見られる。あるいは西欧流の論理実証を越えた「絶対矛盾の自己同一」の日本哲学を地で行くものよりも見える。また、大衆小説でおなじみの「体を許しても、心を許さない」という下世話に似ているともいえよう。

とにかく、「国際化への対処」を名分として行なわれた日本の語学教育が「国際性の欠如」と同根だという一見奇妙でありながら厳然とした事実があるので、語学教育は異文化に背を向けた「日本の中の日本人租界」で行なわれている。日本人は外国へ行ってはじめて日本人租界を作るのではない。すでに国内の語学教育において租界が作られているわけである。

☆語学教育の社会的位置づけを問う

「国際化への対処」と「国際性の欠如」が一致するのは、たとえば次の指摘に裏付けられている。

「ひと昔前なら、『米国に3年暮らした』といったら、いっぽしの米国通と見てよかったです。ところがこのごろは何年米国に住んでいようが、米国のことなど何も知らないで終わってしまう人が多くなった。少なくともニューヨークやロサンゼルスでは、日本食を食べ、バーも散髪も医者も自動車修理も保険も、何もかも日本語で間に合う。だから異文化との接触のさい体験する緊張感を全く感ぜず、日本のペースで暮らしてしまうものが、大企業の駐在員にもヒッピーにも目立っている」(松山特派員、朝日新聞74年7月19日)

この租界現象は、「経済大国」の膨張に伴って「日本の中の日本人租界」がそのまま外国に押し出されたものにはならない。そこで外国語を使うかどうかは、もはや副次的な問題でしかない。たとえ「何もかも日本語で間に合う」ことがなく、英語を使わなければならないとしても、「日本のペースで暮らしてしまう」ことには変わりがないだろう。それは語学教育が異文化に背を向けたものであるかぎり、当然の帰結といえよう。そしてそれこそが基本的な問題として認識されなければならない。

そこに「和魂洋才」の伝統が脈々と生きているのを見ることができる。問題は、「絶対矛盾の自己同一」が「日本の中の日本人租界」から出て外国に及ぼされる場合に、いったい何が起こるのかということであり、外国人にどう見られ、お互いの関係にどう影響するかということである。「自己同一」はそれとして、それが他との関係においてどのような意味を持つかを考えなければならない。

そうなると、外国語を外国文化から切り離しておくことはできない。「シェイクスピアが読めても、日常会話がろくにできない」という語学教育それ自体ではなく、語学教育の社会的位置づけが問題にされなければならないのである。

☆国際化に対応する教育

「国際性の欠如」の中で「国際化への対処」が行なわれるとどうなるか、その答えはすでに事実によって示されている。さしつけ松山特派員の言を借りると、「政治家や財界人が“親善、理解を深める”と称してやって来て、逆に相手を幻滅させ、点数を落として帰った例がどれだけあることか」(同前)というのがその1つである。

つまり、このような「国際化への対処」はすればするほど事態を悪化させるわけである。いっそのこと何もないというのが、まだしも気のきいた「国際化への対処」だという理屈にもなる。語学教育もやめてしまえということさえいえなくはない。

とはいって、「国際化への対処」とは「日本のペース」をやみくもに「アメリカ的ペース」に変えることでは決してない。そんなことをすれば、それこそ元も子もなくしてしまう。「アメリカ的ペース」が「国際化への対処」だと考えるのが、そもそも「国際性の欠如」の表われなのである。

ところが、「シェイクスピアが読めても、日常会話がろくにできない」という従来の語学教育の欠陥を正すのだというふれこみの「画期的な試み」には、一挙手一投足に至るまで「アメリカ的ペース」を押しつけるようなやり方が多い。

このような情勢において、国際化が逆転することのない傾向だとして、それに積極的に対応する国際性とは何であり、また、そのための教育をいかに行なうべきかを問わなければならぬことに、誰しも異存がないだろう。

☆百年の計の一端として

すべからく教育は「百年の計」であり、国際化に対応する教育とその例外ではない。私がこれまで述べてきたことは、明治百年の教育を踏み越える次の百年の計に

直結するものだといつても、決して誇張ではなかろう。

この際、下手に小手先を弄するよりは、むしろ「何もしない」のがよいだろう。そして、いやしくもそれに取り組む以上は、みなみならぬ創造力と勇気をもってあらなければならない。

しかし、私がここに紹介しようとするのは、百年の計それ自体の全容ではない。それを示すことは、明らかに私の能力を越えるばかりでなく、かりにそうでないにせよ必ずしも適當とはいえないだろう。なぜならば、私がこのような議論をしているのは、机に向かって思念をこらした結果であるよりは、国際活動の現場で得たささやかな体験に基づいてのことであり、私にもし何かの資格があるものとすれば、その限られた体験にほかならず、したがって私はそれに立脚してのみ語るべきだということになるからである。

私にとっては、革命的な大構想を掲げるのではなく漸進的・実際的なピースミールの一端を示すことがせいぜいなのである。

☆現状を前提として必要に応える

漸進的・実際的なピースミールとして、具体的に2つの計画を持ち出すことができる。その両者とも、これまでいわば斜に構えてきた異文化に直面しようとする国際適応訓練だといってよい。

その第1作は、「日本の中の日本人租界」において、従来の語学教育を中心とするプログラムの延長として行なうものである。現在見られる「国際化への対処」が「日本人の、日本人による、日本人のため」のものであるという純粹培養的な情況をそのまま前提として、そこから出発しようとするわけである。

それは、私がかねがね唱えている「国際適応学」(adaptology)を、日本マネジメントスクールの「国際化と企業内教育」研究会などを通じて、主として企業人を対象として実地に応用したものであり、小グループに「ショート・ケース」や「交渉ゲーム」を導入して英語で討議を行なうことによって異文化間コミュニケーションの能力の育成を目指している。

第2は、相異なる文化からの参加者を得て、参加者みずからが異文化間コミュニケーションの実験台となり、討議の過程をそのまま「クリティカル・インシデント」として、それから学ぼうとするものである。これはアメリカでかなりの実績を持つ方式であり、日本でも最近行なわれた「異文化間コミュニケーションに関する日米共同研究会議」ではじめて本格的に紹介され、その普及が期待されている。

(評論家)

ドーヴァー海峡

—1957年—

MIYAMOTO SHOZABURO

宮本昭三郎

ある晴れた日、私はドーヴァーの崖の上に立っていた。6月、しかも陽光にめぐまれた日とはいへ、北海からまっしぐらにこの海峡に流れこんでくる風は、思ひがけない冷たさと強さをもつていて、足をふまえて立つ私の身体をこきざみにふるわせた。水際までほとんど垂直に落ちている白堊の絶壁、波頭が小さく白く光る青黒い水のかなたは、ヨーロッパ大陸の低いかげが長くよこたわっていた。

この海峡は、せまいところでは幅が32キロ、対岸フランスのカレー、あるいはブローニュまで、フェリーの船あしでも1時間しか、かかるないはずだった。私はもう何年か前に、櫻窓に顔をおしつけながら、眼下に青黒くひろがる太平洋の無限とも思われる大きさと、とてもない重量感に圧倒されたことを思い出していた。いま見る海峡には、もちろんその大きさも、重量感もない。そこには、重なり合った過去から来る静かな感動があった。

ある場所から受ける印象というものは、そこを訪れるたびごとに弱まるのがふつうであろうが、英國でのながい生活のあいだ、私にはいつもある種の感動をもって迫って来るランド・マークがふたつあった。ひとつはチームズのひとりであり、もうひとつはこのドーヴァー海峡であった。

車でチームズをこえるときは、ウォタールー・ブリッジをわたることが多かったが、南側からアプローチをまわって橋上に出ると、とたんに向う側にどっしりと横たわるサマセット・ハウスなどの建物が、車窓いっぱいにとびこんでくる。国外を旅して帰ってくるたびに、私はこの橋の上に来てはじめてロンドンに帰って来た実感をおぼえるとともに、そのスカイラインのかなたに横たわるこの国の社会の重みを感じるのを常とした。その重さはむろん単に歴史が古いことだけからくるものではなく、この異質社会が成立する途上で経てきた経験の多様さとその量からくる重さだった。

人種問題をはじめ、いろいろな問題をかかえているにせよ、この国の社会はかつてないほど民主化されたものとなつた。かつてディスレーリによって「二つの民族」と形容された貧富の差は見るかげもない。「世界の工場」

としての地位はとくに失ったが、国民の大多数は、一部の人間だけが享受する繁栄と栄光よりも、富の平均化と福祉国家の道をえらぶだろう。

英國の民主化への道は長かった。すでに議会制民主主義の母國と言われた19世紀中途から、現在の民主化の段階に到達するまでには、すでに百年以上の歳月が流れている。しかも私たちがとかく忘がちなのは、英國の民主主義は、英國民が自らの手でつくりあげたものであり、他国から与えられたものではないということであろう。私は、チームズのひとりに古い城壁のように立ちならぶ建物を見るたびに、長いあいだ地層のように重なり合って形成されて来たこの国の社会の層のあつみを考えずにはいられなかった。

チームズの岸がいつも私の心を英國社会の内部へと向けさせたとすれば、ドーヴァー海峡はこの国の対外的な関係、ひいては西ヨーロッパの歴史をいやが応でも想起させるところだった。私は「運命」ということばで形容することを好まないが、英國の歴史を、ひいては西ヨーロッパの歴史を左右したこの海峡だけは、まさに「運命の海峡」とよぶのがふさわしいように思えた。

11世紀のノーマン征服以後、英國本土が外敵の侵略をうけなかつた理由のひとつはこの海峡であったし、ナチズムの嵐の中で、ヨーロッパの灯がつぎつぎに消えていったとき、英國の灯は最後まで消えなかつたのも、この海峡あってのことであった。この海峡ほど「歴史は地理によって支配される」ということばにあてはまるところはあるまい。

だがこの海峡は、政治、軍事上の境界線であったばかりでなく、文化の面でも西ヨーロッパの分水嶺であった。もちろん西ヨーロッパ諸国民のあいだでも、言語、習慣などの相違がある。しかし、私の経験から言えれば、それらの個別的なちがいにもかかわらず、西ヨーロッパ大陸の人たちは、英國人とはちがう共通の何かをもっているようだった。それが何であるかよくつかめなかつたが、結局は大きい意味での思考方法の類似にもとづくものといえそうであった。

かつて北ドイツ人とアングロ・サクソン系英國人は同

じ血をもった種族であった。だがその両者を現在くらべてみたときにわかる思考方法の相違はどうして生れたのか。個人主義にしても、英國とフランスではその性質を異にしているようであった。ずっとのちになって、英國の歐州共同市場加入に関して拒否権を使ったド・ゴール大統領が、「英國民はヨーロッパ人になる精神的な準備ができていない」とのべたのも私にはうなづけた。ヨーロッパの一部であるようでもあり、ないようでもある英國の特殊性。それはこのイングランドの南端に立つたびに私が考えてみることであった。

青黒い海峡の水は、まだ寒々とした暗さをただよわせていたが、泡立つ航跡のむこうには、高く低くつらなる絶壁が、初春の陽光をとともにうけて白く映えた。このあたりでは左右の眺望がきくためか、そのアルビオンの白い壁は、今まで見たことのない全容を現わして、どっしりと横たわっていた。それを背景にはためく船尾の三色旗。暗い英國の冬を通過してきた私の目にしみるようなその色だった。

三色旗の新鮮さは、私がユニオン・ジャックになれてしまったからかも知れなかった。ある土地になれてしまうということは、ある意味でおそろしいことである。すでに私の生活の座標軸は、英國を中心にくみ立てられていた。そして英國が私個人の世界の中心となり、日本は海のかなたにその存在がおぼろげに感じられるだけとなつた。しょせん一個人にとって経験できる世界とは地表の一点にしかすぎない。そしてその世界は天動説の世界であり、自己中心の世界であって、相対の概念はそこに入りがたい。島国にいると、その傾向がとくに強くなるのではあるまいか。私が英國を客観的に見たいと思えば、時おり海峡のむこう岸に立つ必要があった。

急にするとともに鳴った汽笛に気づくと、フェリーはいつしか船あしをおとしながら港に入るところだった。黒いセーターにベレーをかぶり、パイプをくわえた男たちが、ロープを手に叫びかわすフランス語が岸壁にひびいた。ディエップの港だった。

そのころロンドンの町中には、まだ大戦の傷あとがあちらこちらに横たわる煉瓦の廃墟となって残っていて、霧の日などは東京の焼跡とはちがった暗さを漂わせていたが、大都市だけに、ふだんはまわりの活気と騒音の底にひっそりと横たわっていた。だがノルマンディのはずれのこの港には、船のデッキから見ただけでは廃墟こそ見えなかつたが、何とも言いがたい重苦しさがおしかぶさっていた。

だが、それはディエップにかぎってのことではなかつた。北はブローニュ、カレー、ダンケルク、南はル・ア

ーヴル、シェルブルと続いていることに私は気づいた。その重苦しい空気は、陽光にまばゆい砂丘の中からのぞいているトーチカの銃眼から流れだしているようでもあったし、まばらに残った家々のあいだを埋める青草のかげによどんでいるようでもあった。ヨーロッパの戦火がおさまってからもう12年あまりの時間が流れていたが、「大西洋の壁」をはさんでうずまいた鉄片と硝煙の嵐の中にとび散った何万かのいのちの苦悶が、このノルマンディーの岸のどこかでいまも感じられるようであった。

陽光にめぐまれた復活祭のパリは、いきいきとしていて美しかった。私は海峡のかなたのロンドンとはあまりにもちがうその明るさに、若い感性がめざめていくような気さえした。一言でいえば、ロンドンは「生れた町」であり、パリは「つくられた町」である。エトワールもシャンゼリゼーも権力なくしてはつくられなかつたろう。しかし、いまはそれにも歴史のさびがついて、むかしながらのパリとともに美しい調和を生みだしていた。

それにしてもパリは印象派的という形容がぴったりとする町であった。この町では、静止しているものも、動いているものも、なにか心のひだにまでしみ通るようなふしぎな空気のなかに生きていた。このような雰囲気はこの町をてらす光線のためなのであろうか。たしかルイ・ナボレオンは、ブルヴァールの建設にあたって、それが「光りと空気」にみたされるよう望んだ。灰色の空がおおいロンドンにおいて、光りに敏感になっていた私の眼には、緯度からいえばわずかに二度あまり南にあるだけのパリの空が、ロンドンよりももっとあたたかく、だがしつつとした光にみちているのに気がついた。それが生みだす色彩の落着いた美しさは、もちろんゴーガンの色ではなく、やはりモネーあたりの色調であった。

だがパリはなんといっても「人間の町」であった。ロンドンの空気が伝統にみちているとすれば、パリほど人間の存在が空間のすみずみまで感じられる土地はあるまい。そしてその人間は、中世の桎梏から脱却し、自らを回復した人間であった。ヨーロッパの人たちが、それまで無意識のうちにどんな抑圧のもとに生きていたかは、現存する宗教画を見ればあるていど見当がつく。中世の宗教画からうける迫力は、信仰の強さから来るのでもあろうが、私にとっては、その反面そうせざるを得なかつた苦難の生命を暗示するものであった。だが人間は次第に自らの支配の領域をひろげていくとともに、精神の自由を獲得していった。何よりも人間性の追求をうながす町と、精神の自由を享受しつつもそれが放縱にながれることを避けんとする町。パリとロンドンのあいだにはそんなちがいがあるようであった。（独教大学助教授）

LEARNING LANGUAGES

Gregory Clark

(Journalist, *The Australian*)

A lot of people know a lot more than I do about the theory of language learning. But I do think I know something about the practice. For various reasons at various times I have had to learn three of the world's more difficult languages—Chinese, Russian and Japanese.

The experience gave me some very definite ideas about what to do and not do in language learning. My main conclusion—the need to learn through the ear rather than the eye—is not new. But I would like to carry it further than most do. I would claim that book learning, even as a supplement to aural learning, can cause positive harm. On the other hand aural learning in the right environment can allow the average adult to learn languages more quickly and almost as effectively as the young child.

Already I can hear the cynics saying prove it. I can't, since I doubt whether anyone has set out to provide the environment needed. But my own experience might help to make the point.

I started to learn Chinese when I was 22. As a diplomat being trained as a China-watcher I was sent to an intensive language school—eight to ten hours a day of repetitive classwork—for a year. Then I had almost two years of fairly fulltime study in Hongkong, this time with several hours a day of private tuition. The net result of all this effort and expense was disappointing, even though I passed all the exams and was considered to be ahead of the others. I myself knew I could not cope with difficult conversations and it was not till the course was over and I started

to mix with some Chinese on a close personal basis that I began to get on top of the language.

After Chinese I was told I would be going to Russia. I had done a one year university course some time before, so I knew the basic grammar. I got a teacher to tape some story-book material for me and decided to start out simply listening to the tapes in my spare time and meeting the teacher once a week or so for conversation based on the taped material. When I got to Moscow I took private lessons and did some work with taped radio broadcasts. But as with Chinese, it was not until I had struck up relationships in which I was using the language on a daily personal basis that I began to feel the breakthrough.

The final result was quite a good standard, particularly accent, but I still feel that if I had gone about it a bit more systematically I could have done a lot better.

When I moved on to Japanese I decided I would put into practice all the ideas I had gained to date. By this time I was over thirty, usually considered the limit for language learning. I was doing some other work at an Australian university at the time and it obviously was not going to be easy to set about learning a language like Japanese in my spare time.

My first move was to get a very simple reader published in Japan for foreigners learning Japanese. It was written in kana and consisted mainly of simple sentence patterns, with each chapter introducing some new words and forms. A Japanese woman taped

the material and I simply set out playing it over and over again until I could first distinguish the sounds and later, through checking with dictionaries, understand the meaning. Then I would go to her for conversation practice using the material I had been listening to. If I could not understand the grammar I checked it in a teach yourself Japanese book, or got the woman to explain it in Japanese (She did not speak English).

From the reader I moved to a US textbook with sentence pattern tapes to go with each lesson. Again it was a matter of simply playing the tapes over and over again, checking with the textbook to understand the grammar, and getting the occasional conversation practice. After a year of this I came to Japan, where I moved to the technique of taping the NHK news every morning and simply playing it over and over again till I could understand it. Since I knew Chinese characters I could check what I was hearing with what was in the newspapers but that was only a minor aid. The major assist was meeting up with a 400 yen an hour arbeito most afternoons to practice the vocabulary I had learned that morning. Since we were talking about the news of that day our meetings had the immediacy that most conversation practice lacks. To this day I still tape radio programmes as my main source of language learning.

My major aim in all this was to guarantee that my first contact with every new word and expression was in effect the jumble of sound hitting me from a tape. Only after I had sorted out the sound would I then look it up in a dictionary to find the meaning. If possible I would use a dictionary written in the language, not in romanisation. I am convinced that if the first contact with a word is in the written form, particularly romanisation, an impression of that word, and it is almost always a false impression, registers with the brain in a way that is very difficult to remove. This is because as adults we rely

on the written word as the main vehicle for learning. Children cannot rely on this prop. Their first impression must be through the ear, which means they learn it correctly from the beginning. Even teachers who accept the need for intensive aural practice make the mistake of first introducing new material to the students through the eye. They believe that if there is anything wrong at this stage it will soon be corrected once the student starts listening to tapes and conversation. My argument is that once the wrong first impression is there the damage is done. The German who has been speaking English for decades and still says "vos" for "was" does not lack conversation practice. It is simply that when he first came across "was" his mind said "vos" and has been saying it ever since.

Another big advantage of my technique is its learning efficiency. Time and time again I found that the effort of having to grasp at an unknown sound and decypher it in the mind forces it to stay in the mind much more firmly than anything learned through the eye. I read around six Japanese newspapers daily and god knows how many magazines. Very rarely do the new words I meet there stick in my consciousness. But I have only to listen to the ten minute "Watashitachi no kotoba" programme on NHK in the mornings and I will pick up a batch of new words or expressions. Provided I have a chance to use them in live conversation shortly afterwards they will stick.

But for me the really great advantage of the tape rather than the textbook is the learning stimulus it provides. The challenge of taking a tape of new material, listening to it, working out the meaning and then reproducing it is far greater than being presented with a page of written text to decypher. Apart from anything else there is the direct human contact with the narrator. My idea of the ideal language course would be nothing more than a heap of tapes carefully graded in order. The

student would be told to go off and report back only when he had worked out the contents of each tape. If the course was also to teach the written language he would be told to write out what was on each tape.

The key to this system is what I call its immediacy, or direct contact with the living language. The student knows he has to work out what is on the tape if he is to move ahead in his studies. (There is also the enormous advantage of flexibility since the student can go ahead in his own pace in his own time.) Immediacy is what language laboratories with their boring repetition lack, which is why this particular aid has not been as successful as everyone said it would be.

Even so, this is still a long way from the favourable environment given the child in his language learning. The child is surrounded by people who will repeat and speak carefully. The child has true immediacy: the people talking to it want to communicate with it and if it can't understand it will be severely

disadvantaged. If somehow we could produce the same environment for the adult I am convinced he could move ahead almost as quickly, particularly since he has the advantage of knowing grammar and the meaning of abstract concepts. The prerequisite is producing this immediacy. Burning all textbooks which introduce new material through the eye rather than the ear would be a start.

Does age make a difference? I am sure the fact I am losing 100,000 or so brain cells every day has some effect. I still find it easier to speak Chinese, and then Russian, even though my Japanese is at least the same standard and I am using it every day. Ability to learn pronunciation falls away with age, though I am sure an older person using the right learning technique can get to around 80 percent of the mark. But I am convinced that the young well-motivated adult can learn languages well enough to make even the intelligent child ashamed.... provided he uses the right technique.

や、2年ほど前までは庶民宰相と呼ばれたわが国の一政治家にまつわる感懐のみではない。

電子技術や通信技術などコミュニケーションの最先端を往き、かれの在任中に月着陸をすら成功させたあの国で、かれ個人の不名誉——アメリカ全体にとってはむしろ逆であった——を強いたものは、盗聴の失敗であり、何十本かの録音テープであった。そのアイロニーはぼくをおののかせる。人間の運命の不可思議さを思い、技術的な背景のお粗末さにあきれはてるからである。

しかし一たび自制を失ない、権力の甘い味に酔い痴れた人間が用いた際には、あの手の技術ですらが、管理社会強化のうとましい手だてとして用いられ、当の個人はとにかく人類の滅亡までをひきおこしかねない。核戦争のボタンを押すことを命ずるものもまた一個の人間なのである。

人間ははたして self-governable な存在なのであろうか。不完全ながら人間を律し組織してきた既存の原理は、こんごとも有効でありつづけるのか。古京はすでに荒れて、新都はいまだ成らず、というはざまに人類全體がおちこんだのではないか。あれを思いこれを思うと、ニクソンに代わる新政権の登場を一応は評価しつつも、名称しがたい不安がぼくを捉えてはなさない。8.15日記

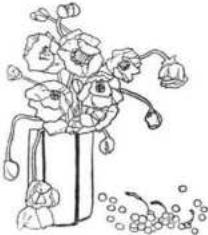
(p. 3 からつづき)

な国情との相違をである。われわれの場合には、その根源があまりにも悠久の昔にすぎ、自然的な統一を保ちえたという偉せの故に、たえず回帰すべき理念をもたなかつた。悪しき形での過去への回帰は、いたずらに超国家主義的な神がかりを誘発するのみで、近代的な精神——どのようにそれを定義づけるにしても——とは相容れにくい。

他方、新しい理念として、国粹主義への反措定として登場し、戦後のお互いが献身を誓った筈の平和主義や文化国家という理想も、ここ30年の時の経過は、むしろその弱体化、稀薄化の方向へと働いた。惜しみても余りある時の経過と、日本の動向であった。

とまれ、ニクソンは退いた。かれの退陣はわれわれ日本人にもさまざまな思いを強いた。ニクソンがやめたのに田中さんはやめる気がないんですかね、という巷の素朴な声には無告の民の万感の思いが籠っていよう。国民の支持率が20%を大巾に下まわっている宰相が、なお再選を当然視されていることへの諦らめといらだちとが読みとれる。満身創痍、断末魔のニクソンですら、なお国民の4分の1以上の支持はとりつけていたのである。

しかもニクソン退陣に寄せる感懐は、単にかれ個人



身ぶり言語一日英比較

KOBAYASHI YUKO

小林祐子

身ぶり言語とは

今日は「身ぶり言語」について話すことになっていますが、いざ「身ぶり言語」とは何かをあらためて定義しようとしますと、すっきりいかないことに気付きます。身体の一部を動かして、ことばがわりに何らかの意味を伝えることができるということから、もじって「身ぶり言語」と呼ばれていますが、ことばのように伝達の意図をもって意識的に示す「身ぶり」は、そんなに多いものではありません。伝達を目的としない行為に、観察者が意味を「読み」とって、記号化される場合が多いようです。腕組みしてぼんやり窓外を眺めている人を見れば、私たちは「考え事している」と感じ、声をかけるのをためらいます。腕組みしている本人は「只今思考中につき、御遠慮願いたい」の意味を伝えたくてやっているわけではありません。これを見る人が、「勝手に」意味を汲みとることによって記号的行動になっているのです。

考えてみれば人間の行為はすべてなんらかの意味解釈を許すものです。そこで、どこまでを「身ぶり言語」にいれるかが問題になります。アメリカのバードウィスティルは、文字通り「身ぶり言語」を研究対象として、“kinesics”という分野を切り開きましたが、その対象には、俗にいう「身ぶり」の範囲をこえ、対人関係で示す人間の肉体的動きのすべてを含めています。これ以外に、対人関係で印象づくりに一役かう化粧や服装も肉体の延長とみなせるのではないか。たばこの吸い方、茶のすすり方など、小道具を含むしぐさはどうなのか。これが「身ぶり」に入るなら、小道具の一種としての贈物はどうなのか。更に又、相手からどの位「身体」を離して置くかの対人距離も、空間を小道具がわりに用いた表現行為にならないか。という問い合わせ次々と発せられ、「身ぶり言語」プロバーと、その周辺との間にはっきりした境界線をひくことが、きわめてむずかしくなります。

身ぶり言語への関心

定義の問題はさておき、コミュニケーションといえ

ば、これまでとかくことばだけに集中していた関心が、今日ではことば以外のコミュニケーション手段にも向けられるようになりました。この新しい関心のたかまりは、近年増大した国際交流と無関係でないように思われます。文化を異にする人が膝をまじえて話しあう機会がふえるにつれ、ことばの壁の除去に成功した場合でも、話しあいがしっくりといかないことが注目されはじめました。その原因の一つとして大きく浮かびあがって来たのが、文化間の非言語的伝達行動の様式の違いです。

文化が異なるれば、ことばが違うばかりか、非言語的コミュニケーション行為の様式も違うのに、ここだけは人間として共通の了解が暗黙のうちに成立しているかのように、私たちは自國流でわりきろうとします。そこにコミュニケーション・ギャップの陥り穴が口をあけて待つことになるのです。あの日本人30分も遅刻しておきながら、ニヤニヤ笑って「すみません」とは何事だ。厚かましいという声。あのアメリカ人若僧のくせに、ふんぞりかえって“Don't mention it.”とはおこがましい、大生意気だという声。ここで日英間の感情的反撥は、双方の表情や身のこなしによって触発されています。ことばが文字通りの意味に伝われば、スンナリいったところを、なまじ表情や身ぶりが伴ったために、その「読みとり」の文化的違いが、ことばの意味までかえてしまっているのです。

同じ文化に属するもの同士では、あまり意識することもありませんが、互いにことばだけで意思疎通をはかっていると思っているときでも、私たちは常にそのことばがどんな意図をもって語られたものか、相手の声調、表情、身のこなしをたよりにホンネをさぐっているのです。表情や身ぶりを読み誤れば、ことばの真意をとり違えることにもなりかねません。異文化間のコミュニケーションのもつれは、めだつことばの違いよりも、目だたない行動の違いに端を発することが多いのです。このような経験から、次第に文化をこえて意味のある話しあいが出来るようになるには、language skillと共に、相手の行動を正しく読みとめて相互作用していくだけの cul-

tural skillが必要だといわれるようになってきました。非言語的コミュニケーション手段に対する最近の活発な研究活動も、こうした時代的要請なしには考えられません。

文字に表わされた身ぶり言語

私がこの問題に最初に興味を抱くようになったのは、現実に外国人と話しあってコミュニケーションの挫折を自分で経験したからというより、英語教師として学生と一緒に英米の戯曲や小説を読み、そこに描かれている彼らの「身ぶり言語」の解読に手をやいた経験からです。そこで現実のコミュニケーションの場に入っていく前に、今日は英語の先生方もお見えになっているということですので、身ぶり描写という観点から、日英身ぶりの比較をとりあげたいと思います。

学生と一緒にイギリスやアメリカの現代小説や戯曲を読みはじめて間もなく、かなり高度な抽象論についていける英語力をもっている学生でも、ごく日常的な簡単な身ぶりや表情の描写にくると、とたんにつまずくことに気付きはじめました。たとえば、先日もある小説の一駒で、大富豪が、私立探偵に雇った男の仕事が気に入らず、どなりちらす場面がありました。どなられた男が次にとった言動として，“Please!” He raised his hands. “Don’t get mad at me.” とあったのですが、学生のほとんどは、その男が手も合わせなばかりに、「どうか腹を立てないでくれ」と懇願したとつらいました。ここでは “Please!” は “He raised his hands.” という身ぶり描写によって「懇願」ではなく、いきり立つ相手をおしとどめる「制止」の意味に使われていることが分る仕組になっています。学生は “raised his hands” の様子が分らず、結局日本人的感覚で状況判断して、クールな探偵どころか、低姿勢の弱気な探偵をそこに読みとる結果になってしまいました。

このような読みとりの失敗を幾度か経験するうちに、身ぶり描写がとりわけ問題になるのは、言語習慣と生活習慣の違いを集約的に包みこんでいるからだということに思い至りました。日本という文化環境で、日本語を母国語として育って来た私たちが、英語の身ぶり描写をイメージ化していく作業を通して、外国語で書かれたものを理解することは、究極的に、外界の認識方法を新たに学び直すことであり、文化の新しい約束ごとを学びとることだということを徹底的に思い知らされます。自国の言語構造、自国の文化構造をそこに投影して理解しようとこころみる限り、とんでもない思い違いをするものだということを、身ぶり描写は実に容赦なく教えてくれま

す。人間ならこう見るのが当然、こう感じ、こう考え、こう行動するのが当然と思っていたことが、実は one of the ways に過ぎず、違った言語、違った文化に育ったものには必ずしも当然ではないのだという、異文化に接するうえで身につけるべき基本的態度を学ばれます。

難航する言語記号の解読

いうまでもなく、身ぶり描写の正しい把握には2つの作業が伴ないです。その第1は、個々の単語の辞書的意味を文法規則によってつなぎ、どんな身ぶりか形の上からおさえる言語記号の解読です。ついで、その文脈で、描かれた身ぶりが、英米の社会ではどんな意味に使われるか、非言語記号の解読をしなければなりません。「日英身ぶり言語の比較」といえば、この第2の作業だけを問語にすべきなのでしょう。しかし、第1の作業が著しく難航をきわめるものであり、その作業を通じて、日英それぞれのことばが、外界をいかに異なった形に構造化しているか、私たちの認識がことばによっていかに型どられているかをあらためて知らされますので、この点をまずとりあげてみましょう。

そもそも身ぶりなどというものは、人間であれば人種、文化を問わず誰にも等しく与えられている五体の動きに過ぎません。描写から身ぶりの形をわりだす位造作ないように思います。ところが、いざやりはじめると、「同じ」とばかり思っていた五体が、日英のきりとり方の違いで、あまり「同じ」でないことに気付きはじめます。私たちが、たとえば「人間に2本の手がある」と言うところを英米人が“Men have two hands”と言ったとします。その時一方の頭には肩から指先までの細長い部分があるのに対し、他方には手首から先の短い部分しかありません。“arm”と“hand”を含めた「手」ということばをもつ私たちには、“hand”も“arm”も共にあがっている動作を、英米人がどのように“raise one’s arm”と“raise one’s hand”に使いわけるのか感覚的につかみにくいものです*. この二つを言語的に区別する習慣をもつ英米人にしてみれば、当然のこととして、私たち日本人が「めっそうもない」とふるその「手」を、ふりかたに応じて “wave one’s hand(s)” と “wave one’s arm(s) (frantically)” を使いわけています。私たちにはご苦労なことだと思われますが、二つの区別になれた英

* 合図をする、平手うちを喰わす、無防備の手のうちを示すなど、“hand”をあげる事を目的とし arm が随伴的に動く場合 “raise one’s hand.” それ以外、例えば体操で手をあげれば “raise one’s arm.”

米人には、日本語の「手」には手をやくようです。「手枕をしてねた」などと書いてあっても、手のどの部分に頭をのせたのか（両手なのか、片手なのか）も見当がつかないと嘆くのを耳にします。

私たちは体なら体というものをそのまま認識するのではなくて、有意義と思われる形に分節され、名前を与えたもの、すなわち言語化されたものを頭に入っています。体の側には、どの部分を一区切りとみなさなければならないという必然性はないのです。しかし、いったん人間側の必要に応じて、ことばの上で構造化されてしまうと、それ以外に体のとらえようがないと思ってしまうものです。この意味で、私たちの認識の仕方は、ことばによって型どられるといえるでしょう。

「コシがない」英米人

以上のことにつくづく感じさせられたのは、能のしぐさの英訳をしていて、中腰、小腰などに適当な訳語が見つからず、インフォーマントにしぐさを見せて、目に映るままを英語で表現して貰った時のことです。ピタリときまる表現が出て来ないまま質問を重ねていくうちに、私たちの言う「コシ」が英米人ないことに漸く思い至りました。ということは、後部下半身のきりとり方が日英で異なり、「コシ」に一対一で対応することばを英米人がもっていないということです。日本語の「コシ」は、hips, waist, back を部分的に包みこんではいますが、そのどれとも重なりません。「コシ」が一分節として日本語で独立の存在を与えられているのも、起居動作のかなめとして意識されることの多いキモノ、タタミ、オジギの生活と無関係でないように思えます。同時に、そのことばがあるから、存在がより強く意識されるとも言えます。

私たちは驚きのあまり「コシがぬけた」と感じます。老化現象も「コシ」に来て、遠出がむずかしくなったと意識します。赤ん坊も「コシがかたまって」歩きはじめると言われます。これら人間として共通の体験も「コシ」ということばをもたない英米人は、感覚的に違った受けとり方をします。驚いて動けなくなるのは“knees”や“legs”がメロメロになるからであり、老人が家にひきこもりがちなのも、赤ん坊が歩かないのも、“legs”的問題とされます。

“lap” のない日本人

外国語を新しく習い始めた頃、私たちはそこにあるものの別名を学べばよいと簡単に考えますが、「そこにあるもの」とは、結局、母国語がその存在を「あらしめて

いるもの」なのです。母国語が命名しないものの存在を認めることは容易ではありません。たとえば、英語は、日本語の「ヒザ」に当る部分に “lap” と “knees” の2つの名前を用意しています。辞書は lap を「坐ったときの腰から膝がしらまでの部分」と定義していますが、これだけではその「正体」は漠として、つかみどころがありません。そこで、例によってインフォーマントに根掘り葉掘りきいてみました。丁度その時遊びに来ていたイギリス人がふと「私たち女性は ‘lap’ をよく持つが、男性は滅多に持たない」と言って私をハッとさせました。その時まで私は肉体の一部に “lap” を探そうとしていたのです。結局 “lap” は私が知り得た限りにおいては、重ねた手、赤ん坊、ナップキン等、何かものが受けとめられる状態になっている「ヒザ」をさすもので、同じ坐った時のヒザでも、何かの受け台として焦点をあてない限り “lap” と呼ばないようです。その意味で男性にも “lap” はあるわけですが、あのイギリス人の何気ないことばは私に言語の虚構的な「力」を感じさせました。

このように何かを受けとめる場として lap をとらえると、このことばがなぜ比喩的に a seat of responsibility とされるかに納得がいきます。日本語で責任を受ける場は「肩」と相場がきまっています。英語でももちろん「肩」は責任の場とされますが、どうも「膝」と「肩」とでは責任に対する態度に微妙な差があるようです。その差をつくっているのは、“lap” が示唆する「坐の姿勢」のように思えます。つまり坐ったままの動きのとれない “lap” に落ちた責任ですから受身性が強調されます。“It is your baby.” だといって baby (責任) をポンと膝におかれれば、逃げ出せない helplessness がつきまといます。ある小説のなかでやり手の社員が仲間の無能さを嘆き “All the work ends up on my shoulders” とこぼしているところがあります。この場合、“in my lap” と言うことも可能ですが、言い変えた途端、仕事に対する男の気構えが妙に消極的になります。仕事を背負ってたつ行動性を表わすのには “shoulders” が必要なのです。

疑惑に「目を細める」英米人

体のきりとりの違いから話は比喩表現にそれてしましましたが、きりとりの違いは体の部分ばかりでなく、表情や身ぶりにも認められます。最近アメリカ人の書いた外人観光客用の日本旅行案内書を読んでいましたら、この国にはわれわれのやり方と反対のものが多いと、いろいろ例をあげたなかに、われわれが「疑惑に細める目」を、この国の人には満悦のときに見せると書いてあります

た。おそらく日本語の「目を細める」という表現からきた誤解かと思われます。なるほど、日本語では「孫の晴れ姿に祖母は目を細めた」と言いますし、英語では“His eyes narrowed with bitter distrust.”などと言います。だからといって日本のお婆さんが、にらむような目で孫の晴れ姿を見るわけではありません。満悦の表情は英米人であろうと、日本人であろうと同じように、目の線が柔軟にゆるんで、目尻にしづが寄り、目が細まります。しかし、英語では喜悦の表情には、もっと動きのある口との微笑を中心につきとり、目の細まりを言語化の対象からはずしているため、英米人には目が細まったという自覚がないだけです。一方、一点をみつめて考えこむ目もまた焦点がしほられ、目の線が緊張して鋭く細ります。英語ではこの場合の目を“narrowed eyes”として言語化する習慣があるので「細まる」という自覚があるだけです。

詩人のようにことばのおしきせをふりきれる人種はともかく、一般人はものごとを透明に自分の目で自由にとらえることがなかなか出来ません。言語が引いた線にそってしか、きりぬきが出来ないようです。そのため外国語が母国語と違った形に表情をきりとると、たとえばその表情を日に何回となく自分でやったり、見たりしても、どんな表情か戸惑ってしまいます。私たち日本人は「しかめっつら」を見ると、「眉を（八の字に）寄せた」、「しかめた」など、眉間に寄った眉として把えます。英語でも“knit one's brows”とか“draw one's brows together”と言いますが、同時に“one's brows go down”と下降の動きとしてもとらえます。よくよく表情を観察すれば、眉は寄ると同時にさがりもするのですが、言語的に前者の動きとして見るようになじみづけられている日本人には“lowered brows”から「しかめっつら」を想像することは困難です。

へこたれて「あごを出す」日本人

「さがる」に関連して言えることは、英語の表情のきりとり方の基本として、意氣消沈、無気力、憂鬱、などまさにダウントンの状態の人間の体や顔の各部が下降線で統一されることです。結んだ唇が開き、あごがさがれば、「顔が長くなる」と言うわけで、ブスッとした「仏頂面」を英語では比喩的に“His face lengthens”とか“He pulls a long face.”と表現します。この反対に意氣激昂すれば、「長い顔」も“lift up”され、「への字」の口もとも“turn up at the corners”と上昇線をたどります。そこで、日本語の喜悦に「下がる」目尻や、参ったときに「でる」あごが、英米人にはつかみにくいもの

になります。生氣を失えば、ひきしまったあごがだらしなくゆるむのは、人間に共通の生理現象です。英語ではこれを“sagging chin”とみます。“sagging chin”は“long face”とつながるのは先に指摘した通りで、そんな不景気な顔つきの人間を“He's down in the mouth.”とも形容します。「下った」あごを、日本語で「あごが出る」というのは、私の勝手な憶測では、あごだけをきりとらず、カクンと後ろに傾いた頭も構図にいれているからではないかと思います。ことばの上で参ったときには「あごが出る」ものときめられると、実際にそうとしか思えず、「あごが下って、長くなった顔」といわれても同じような表情は浮んで出来ません。

擬態語で表わされる身ぶり

ことばに表わされる身ぶりの問題として、もう一つ言おきたいのは、日本語が表情や動作の微妙な動きを示すのに擬態語を多く用いるということです。「ブスッ」としてものを言なわい。「ニッ」と歯をみせる。「デン」とあぐらをかく。「ブイ」と席をたつ。「ツン」とおたかくとまる。このような感覚的とらえ方をしているとき、「ブスッ」だの「デン」だのを生み出す身体的要素が何かに私たちの関心はむきません。擬態語をもたない英語は身体的動きを線状的にたどって表現しようとし、ここでまた解説作業に手まどります。たとえば、日本語が落ちつきのない態度を「モジモジしている」と表現するところを、英語では“squirm one's toes”や“move one's toes around inside his shoes”など足の指の動きで現わしたりします。足の指の動きに限定して「モジモジ」を考えることのない私たちには、何とも奇妙な動作としか思えないで困ります。

厄介な非言語記号の解読

これまで同じ感情に誘発されて現われる同じ身体的変化が、日英それぞれの覗き窓を通すと、変わったものに映るということを述べて参りました。同じ身ぶりですらこの調子です。一定の状況で日本人が見せない英米人特有の身ぶりの把握は一層困難なのは当然と言えましょう。たとえ言語的に解説出来ても、それが何を意味するかは、英米の社会の約束ごとを知らなければ手も足も出ません。

たとえば、ある男の人物評として、「茶をのむとき “cock his little finger”するような奴」と書いてあっても、一体どんな風に茶を飲むのか、それが又どんな人柄を意味するのか、英米の社会、生活習慣、価値体系を知りつくしていなければ分るものではありません。箸よ

り重いものを持ったことのないきゃしゃな指先を有關マダムがきどってちらつかせる自己顯示的なしぐさと知って、その男のキザさがようやくわかるものです。

日本の小説の英訳で、原文との違いが目立つのも、日本人特有のしぐさに集中しています。これもある意味で非言語記号の解読のむずかしさを裏書きしているのではないでしょうか。三島由紀夫の『宴のあと』には男性におせ辞をいわれた中年女性が照れて色っぽく「うちますよ」と袂をふりあげる場面があります。いい年をした女性が艶っぽく男性を「うつ」ことが英米人には想定しにくいのでしょうか。ふりあげた袖は羞じらいの顔を隠すためということにされてしまっています。同じ三島の『春の雪』では、高貴な女性の入室を緊張して待つ青年が、廊下に布ずれの音をきいて居住いを正したところで、西欧流に青年をすくと立ち上らせてしまっています。

身ぶりが見た目に歴然と違えば、注意もむき、その意味を知ろうと努力します。これに対し、同じような形の身ぶりには、自分の文化で通用する意味を課し、誤解していることに気付かないことが多いです。事実、非言語記号には人類共通のものがあり、それがかえって読みとり可能の期待へつながっていくようです。現実に国際間のコミュニケーションの行き違いも、類推で意味がはかれるようなありふれた行動の読み誤りから起きています。

残されたコミュニケーションの壁

私は外国語で描写された身ぶりを読みとるのに、まず言語記号の解読でてこずると言いましたが、非言語記号の扱いにくさはこれと比較なりません。語いと文法規則をある程度身につければ曲りなりにも解読出来る言語記号と違って、非言語記号には構造的アプローチがむずかしいからです。

この点に関し、エドワード・ホールは次のように言っています。「ひとは異なる文化に接し、その文化がつかめないと。或いはつかめたつもりで実は誤解している。だが、この際、分った分らないという問題は、概ね非言語的意味の問題なのではないだろうか。人間のある行為に対して、それぞれの文化が与える意味づけ、非言語的意味システムは、まさに文化そのものであり、こういう領域の文化的接触にくらべれば、ことばの翻訳などくらべものにならないほど、明晰といわねばならない」

まさにその通りであって、ことばの壁の克服は異文化間のコミュニケーションの問題の半分、それもやさしい

方の半分を解決したことしかならないように思われます。私は主として、文学という創られた世界のなかでの身ぶり言語の文化的特色を見て来ましたが、そこで日英の相違に気付いた目を現実のコミュニケーションの場に転じてみると、以前のように威勢よく「同じ人間、裸でぶつかれば誠意は通じる」などと言っていられなくなりました。

裸でぶつかるといつても所詮文化に型どられた自分をさらけ出すことであれば、こちらの思うように受けとめて貰えるはずがないのです。受けとめて貰えると期待する限り話しあいから得るものは失望や期待はずれであり、それはやがて偏見へつながる危険性をはらんでいます。

甘えの身ぶり言語

事実、相手にこちらの心情を察して貰えるという期待の強さそのものが、日本人の伝達行動の一つの特徴を生み出しています。ことばのあいまい表情もそのあらわれですが、非言語的な表現にもみられます。たとえば、ばつが悪いときの照れかくしのしぐさなどがそのよい例です。私が日英の小説から身ぶり描写を拾ってくらべてみた限りでは、英米人の場合、若い女性が羞じらいに「うつむく」位なもので、ほとんど照れかくしのしぐさが見当りませんでした。日本人はといえば、「身を小さくする」、「(手で)顔をかくす」、「あたまをかくす」、「くび筋に手をやる」、「くびをすくめる」、「舌を出す」など種類も豊富で、やる人の年齢もかなりの幅にわたっていました。笑いが伴なって、「目下照れの最中」を手放しで公表するというのが特徴的です。これも、結局は自分の心情を十分察して貰えるという相手の心に寄りかかる安心感があつて成り立つしぐさといえましょう。

大宰治は書簡の一つで、日本「文化と書いて、それにハニカミとルビをふること大賛成」と言っていますが、日本人の照れやはにかみの大っぴらな表現には相手の好意あるとりなしに期待する甘えの心理が働いているように思われます。どうも日本の社会には甘えを許す情緒共同体的体質があるのではないでしょうか。『ヨーロッパ像の転換』と書いた西尾幹二氏は「西欧人には照れくさいという感覚はほとんどないように見受けた」との感想を洩らして居ますが、ないというより日本の甘えを許さない精神的風土のなかにあって、そのような表現が抑えられていると見るべきでしょう。

身ぶり言語の壁をこえる努力

「照れ」という感情一つとっても、日本人と英米人の

表現のしかたには違いがあります。裸でぶつかれば分りあえるほど、身ぶり言語の壁はうすいものではありません。むしろ壁の存在を認め、異なった環境、異なった言語、異なる習慣で育てば、一方において当然なことも他方には当然でないかも知れないという、相違に開かれた心をもつことが大切だと思います。

言語記号は口をつぐめばそれで発信がとまります。非言語記号の始末の悪さは、自分がその場に身をさらす限り、こちらに発信の意図がなくても、相手側に受信されてしまうことです。自分としては、文化のなかで身について来た行動規則にそっているだけでも、相手はこちらの意図しないような意味を汲みとるかも知れません。私が相違に開かれた心をもてというとき、第一に自分の行動が相手の勝手な読みとりに常時さらされていることを自覚することであり、同時に相手の行動を読みとるのに当って、これが話し手の文化を反映するものであり、自國の文化的尺度で判断してはならないという自戒の心をもつことを意味します。異文化間のコミュニケーションにたずさわる当事者同士が、このように相異を認めあい、理解しあえる道を模索しようとするとき、はじめて文化の出あいが、視野の広がりをもたらすのではないかでしょうか。

このような意味のある文化の出あいを可能にするには、相互に問題点を率直に話しあえるような関係を作っていくことが大切です。今まで暗黙の了解事項として不間に付して来た非言語的コミュニケーション行為を話しあいの場にのせ、これを「読みとる」手ほどきを相互に与えあうことも必要でしょう。言いかえれば、本来なら意思疎通に役立つべき身ぶり言語が文化を異にする場合にはかえって雑音をもちこむ危険性があることを警戒し、ことばによる意図的メッセージの量をふやして、雑音を消しあっていく努力が必要だということになります。

これまで日本人のあいまいな言語表現については、さんざん言われてきました。相手の要求にはっきり「ノー」と言うべきところを、かどがたつのをおそれて、「考えておく」などと言うから外人に誤解されるのだとお説教もされてきました。たしかにそうに違いないのですが、「考えておく」ということばだけをとりあげるなら、これは日本人にだってあいまいな表現です。ただ日本人同士であれば、身ぶり言語の微妙な働きで、こちらのホンネが相手に伝わるから、大した誤解もおこらずにすんでいるのです。そこで身ぶり言語の正しく通じない外国人を相手にするときは、せいぜいことばのメッセージを的確にすべきだということになります。

私ははじめに人間が膝をまじえて話しあったとき、身ぶり言語がどんなに大きな役割を果しているかを強調しました。しかし、結論としてたどりついたのは、異文化間のコミュニケーションにおけることばのメッセージの強化の必要です。それは言語記号が、非言語記号にくらべて、はるかに構造的取組みが可能であり、意識的操作がきくと思えるからです。その文化に育たなければ、解読のコードを手にすることがむずかしい身ぶり言語の厚い壁をのりこえるには、手におえる言語記号を最大限に活用する必要を私は痛切に感じています。

(東京女子短大助教授)

(p. 30 からのつづき)

と、ほとんど直線に近くなる。しかるに、日本語で 150 位以内のものは、次の 6 語に過ぎない。

63位 (57. ミル), 68位 (425. ナニ), 70位 (3. メ),
112位 (427. ドウ), 144位 (59. キク), 146位 (326.
オオキイ)

しかるに、英語で 150 位以内のものは、次の 16 語(ないし 17 語)ある。

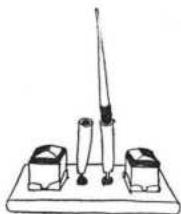
37位 (429. when), 42位 (425. what), [47位 (327.
little)], 48位 (426. which), 51位 (424. who), 53
位 (57. see), 60位 ([75] look), 77位 (3. eye),
85位 (328. long), 87位 (427. how), 91位 (1. head),
94位 (428. where), 99位 (377. day), 104位 (96.
house), 117位 (22. face), 134位 (379. night), 148
位 (58. hear)

英語の疑問詞は関係代名詞として用いられるから頻度が高いのかも知れないが、その点を考慮外におくとしても、両統計結果にはかなりの差異があると思われる。因みに、M. West の統計によると head, house が動詞として用いられる例はそれぞれ 5%, 2% であり、face には % が示していない。(未完) (東京大学名誉教授)

基礎語彙について (1) [本誌 No. 46] 正誤表

誤	正
p. 33脚注, 左, I. 1.	いる, 日本人
p. 37, 左, I.-17	いる日本人
	6. 2. さて,





身ぶりしぐさ

NISHIYAMA

SEN

西山千

ニューヨークのある高校で起った事件であるが、その高校で女子生徒が数名学校規則を破って、未成年でありながらタバコを構内で吸っていた疑いでつかまった。その大半の生徒は不良として知られていたが、なかの一人は別にそれまで悪い記録を残していなかった。彼女はプエルト・リコ系の生徒で、偶然他の数人の現場に居合わせて、いっしょにつかまつたのである。

そこで校長は生徒を校長室に呼んで事情を聞くことにした。ところがこのプエルト・リコ系の娘と簡単に面接しただけで校長は彼女も「有罪」と決めてしまった。

その理由は、彼女の話したことよりは態度があやしかったというためであった。つまり彼女は校長の顔を見ないで、下を向いたままであって、いかにもなにかを隠しているらしい姿勢であった。

彼女の母親が抗議した。「うちの娘はおとなしい善良な子です。隠れてタバコを吸うはずがありません」といって近所の知り合いに訴えを打ち明けた。

一方校長はこれらの生徒に対して罰則として一時登校停止を命じようとしていた。それを聞いたラテン・アメリカ系の近所の人たちが、無実を訴えている母親に同情して、高校へ押しかけて行った。険悪な空気になった。

そのなりゆきを見ていたスペイン語の先生が校長に事情を聞いて、「は、はん」と思った。結局アメリカ人の習慣とプエルト・リコ人の習慣の相違が原因であると判断した。よく調べてみると、問題の生徒は子供から親に教えられていた礼儀を守っていたにすぎなかった。プエルト・リコ人は目上の人々に顔を直接見つめることは失礼であると思い、下を向いて目を相手から離しておくことが礼儀であるとしている。そのため、この娘は校長の前では下を向いていた。

その事実をスペイン語の先生が校長に説明して、校長は直ちに納得し、問題は解決した。（“Body Language”, by Julius Fast-M. Evans & Co., 1970）

アメリカ人なら目上の相手に対しても、顔を向けて話すのが正直な態度と思っている。下を見つめたり、相手の目を故意に避けようとする態度は、なにか腹黒い

ものを隠している意味に受けとめられる。

ある程度日本人もこのように下を向いたり相手の顔から目を避ける習慣がある。若い世代はそれほどでもないだろうが、子供のときからの教育によっていろいろ態度が異なるだろう。人によっては相手の目や顔を避ける習慣が身についていて、西洋人に与える第一印象が好ましくない例がある。そういう場合、なにかの事情でいやおうなしに両者が接触を避けなければならないようであれば、その第一印象による誤解が解かれる可能性がある。しかし何回も接触する機会がない場合は、誤解がそのまま続くかもしれない。また第一印象が悪いために、相手が接触を避けるかもしれない。

身ぶり、しぐさによるコミュニケーションは、いうまでもなく、その背景の文化と習慣によって決定されるから、相手の文化が異っていればコミュニケーションの受けとり方も異なる。それがまた重大な事態を引き起すこともある。

横須賀である老女がアメリカ海軍の水兵に殺された事件が新聞に報道されたことがある。その記事によると、この水兵は酔っ払っていた。そして日本人の老女に一万円札をつき出して両替を頼んだ。ところが「彼女はおれを侮辱した。それでかっとなって刺し殺してしまった」と水兵が警察署で白状したそうである。

記事はそれ以上の説明がなかったが、「おれを侮辱した」ということばの背景に重大なしぐさの誤解があったように思われる。つまり、水兵が老女に札を見せて両替を要求したとき、彼女は水兵のいっている英語がわからなかったか、それとも小銭がなかったのか、いずれにしても否定するしぐさを手で見せた可能性が強い。そのしぐさはよく日本人の使うしぐさである。顔の前に手をたてにもってきて、左右に手を振るしぐさである。

ところがアメリカなどではこれに似たしぐさが相手をもっとも侮辱したものになる。それは親指の先を鼻にあてて、残り四本の指を左右に振るしぐさである。男の子供などが相手をばかにする気持を示すために使うしぐさもあるが、それをやって、なぐり合いの大げんかにな

るときがある。

場合によっては、この水兵は老女のしぐさをそのように受けとったかもしれない。もちろん老女がこのしぐさを使わなかったかもしれないが、外人に自分の拒否の意志を表わそうとして口で“No, no!”とかなんとかいいながら手を振るのは、日本人としては自然な行動だろう。それがこの悲劇の原因であった可能性は十分ある。

日本式に手で相手を招くしぐさは、西洋では別れる意味になっている。親指を一本たてるとか小指を一本たてると日本では「男」「女」の意味になるが、アメリカでは意味をなさない。

テレビのクイズ番組でジェスチャーの遊びを放送していたとき、有名スターが出演しているなかに一人の外人の娘さんを登場させ、日本人のスターが「ゆで卵」という題をジェスチャーで演じるのをこの外人女性に当てさせようとした。日本人は手で卵の形をまね、それからなべに水を入れて卵も入れてからガスの火で温めるしぐさをし、それから卵をとり出すしぐさをした。卵は熱いから手にもつと耐えられなく、指を耳たぶへもっていって、きゅうと耳たぶをつまんだ。ところがこの外人は最後のしぐさを見て困ってしまった。二、三回も日本人が同じしぐさをして、最後は耳たぶをつまんだ。外人女性はどうしてもわからないうちに時間切れになってしまった。彼女は困った顔をしながら、“I think he was boiling something round, but what's that got to do with pinching his ear?”と不思議そうにいった。

指を冷やすために耳たぶをつまむしぐさはアメリカなどの習慣にはない。最近アメリカの新聞の生活の知恵を紹介する欄に、「やけどしかけた指を急に冷やすためには、耳たぶをつまむとよい」という知恵が紹介されたのを見た。これが広く普及すれば、ジェスチャーを当てそこねた外人の娘さんの困惑も解消するだろう。

意識的になにか相手に伝えようとする意味のしぐさだけでなく、身についてしまった自然な身ぶりやしぐさ、体の姿勢などにも、日本人と西洋人の間にかなり多い相違がある。なかには、ことばでは説明しにくい身ぶりもあるが、いわゆる「体つき」とか動き方によって日本人かそうでないかがわかる気がする。

日本人の男が歩いている後姿を見ると、脚を前方にまっすぐに進めないで、左右に少し股を広げるような進め具合にして、体全体が左右に大きくゆれながら歩いて行く形がよくある。柔道をやる人の歩き方ともいえるだろう。急いで歩いているときは、その後姿はぎくしゃく左右にゆれて、なんとなくぎこちなく見える。

西洋人の男はめったにこのような歩き方はしない。体

がわずか左右にゆれるだけで、脚はまっすぐ前方に進められる。急いで歩くときは、脚が早く動いても胴はほとんどゆれずに、すうっと前進する。

外国へ旅行していて、人の後姿だけで日本人がわかる例がよくある。その体つきが「私は日本人」と語っているようだ。そして動作が「日本人らしく」見える。

たまに全く西洋人の体つきや動作の日本人を見受ける。ところがそういう人は長年海外に生活している日本人であったり、日系の外国人であったり、外国の社会と文化を身につけてしまった人である。

おもしろいことに、その逆の例もある。長年日本に住んでいて、日本社会になじみ、日本語を自由に話せるようになった外人が、体の動き方まで日本人らしくなっている例がある。そういう人と話し合ってみると、考え方も日本人に似ている場合がある。日本社会と文化が身についてしまっているためらしい。

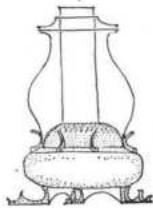
国際キリスト教大学のジョン・コンドン教授は“Communication is behavior”といっている。人間のすべての行動そのものがコミュニケーションであるという広い定義は、考えてみれば全くうなずけることである。行動すれば必ずその行動が相手になにかの意味を伝える。もちろんその意味を相手が正しく受けとる保証はない。

相手が受けとる意味は、その人の社会習慣によって決定されるから、ブルート・リコ系の娘さんの例や日本人のしぐさの例のように反対の意味に受けとめる場合が少なくない。日本の畳の生活と西洋の椅子の生活とは、行動を逆にさせる問題もある。畳の場合は、相手とあいさつを交わすときは、すわってしまうか、ひざまずいて行う。板張りの床だったら椅子から立ち上がってあいさつするのが礼儀である。女性はこしかけたままあいさつするが、それでも非常に位の高い相手に対しては女性も立ち上がる。ところが畳と床を無視して、日本式と西洋式を比較すれば、礼儀が正反対であるから、その行動は相手に正反対の意味を伝えてしまう。例は無数にある。

したがって、少なくとも意識的に行うしぐさや身ぶり、その他の行動は、相手の文化を考慮して事前に勉強する必要がある。自分勝手に「おれは日本人だから日本式で当たり前だ」という態度をとれば、結局自分自身が誤解されて損をする。

(国際コミュニケーター)





在米日本人と身ぶり言語

IMAMURA SHIGEO

今村茂男

1959年に Edward T. Hall が *The Silent Language* を出版して、にわかに一般人の間にも関心を持たれるようになった「身ぶりの言語」も、近年はかなり系統的な研究が進められつつある。私の見る限りでは、言語学よりもむしろ Communication とか心理学や人類学の畠の専門家が研究熱心のようだ。その研究対象も単に身体的な、いわゆる gesture から、時間的・空間的な para-linguistic, extra-linguistic, non-linguistic の広い面にわたっている。私が主としてアメリカ人大学生を対象にした「外国语としての英語教授法」を教える時には、重要な課題のひとつとして概論を試みるのだが、本号がこの問題の特集とあれば権威者が多数寄稿される事と思われる所以、私はアメリカに住む日本人、それも長くて数年しか滞在しない留学生などのような人が、「身ぶりの言語」についてどのような経験をするかにつき、観察記を提供したいと思う。

日本人が外国で生活をして、「身ぶりの言語」について体験する事は大体 3 つの分野に大別できるようだ。ひとつは外国人のそれが何を意味するのかわからない、ないしは誤った解釈を下す。ふたつ目は日本流のそれを無意識に使ってその国の人によかってもらえないかったり誤解を受けたりする。3 つ目は外国のそれが不自然に、大ていの場合は大きさに身について、その国的人はもちろん日本人にもこっけいに思われること。ではまず第一の分野について。東洋人や欧州人にくらべてアメリカ人は informal であり friendly である事を自らも誇りしている。従って初対面の人でも、特に前もって文通があつたり紹介者があつたりした場合だと、まるで百年の知己でもあるかのように馴れ馴れしくする。ところが相手が日本人である場合、話し合っているうちに段々そのくだけた親しさが薄らいで形式ばって来るのを見る事がある。はじめはそれが言葉の問題から来るのだろうと思っていたのだが、どうもそうではないことに気づきだした。少くともそのひとつ大きい原因是日本人とアメリカ人の持つ距離と肉体的接触に対する感覚の相違にある

としか思えない。距離というのは、立って話している場合、アメリカ人は日本人同士が立って話をするよりずっと近くに立って話す習慣がある。それだけでも日本人としては余り居心地がよくないのに、私のような小男はなおさら威圧感を受ける。体格のいい女性と向き合っている時なんか、まるでおっぱいと話をしているようで目のやり場もない。いきおい日本人は固くなるから話がぎこちなくなり、それを感じてアメリカ人もつり込まれて形式ばって来る、というのではないかと思う。なおそのアメリカ人でさえ、南米人などに言わせると遠くに立ち過ぎるからよそよそしいと言われる。

肉体的接触と日本語で言うとどうも聞こえがよくないが、たとえば握手のことである。日本人もこの頃は握手には馴れたが、アメリカ人はその上によく背中に手をまわしたり、(肩を抱くと言ったほうが適切かも知れない)背中をたたいたりする。これも日本人には余り馴染めない。あれやこれやで、心の中ではうちとけたいと思っても表情がこわばったりするので、実際以上に日本人は formal だと思われる傾向がある。

同じようなことが eye contact についても言える。アメリカ人は話をする時に相手の眼を見るのを礼儀とする。個人対個人はもちろん、たとえば授業や講演の時にも、聴衆のあらゆる方向へ眼をやることを強調する。それにくらべると日本人は相手を見つめるのはかえって失礼で、伏目がちにすべきだと誰に教えられるともなく心得ている。これがまたアメリカ人にはよい感じを与えない。とくに伏目からチラッチラッと上目使いに相手を見たりすると、とても sly だと感じるらしい。難かしいものだ。

遠くのほうに知人を認めたがどうせ挨拶の言葉を送っても聞こえそうにない時、レストランなどで食事をしている時に近くを知人が通った時、他人と話している近くを知人が通った時など、日本人だったら軽く頭を下げるのが普通だろう。ところがアメリカ人は逆に頭を、と言うより顔を上に上げる。馴れない日本人には横柄だと映るようだ。逆にアメリカ人の中にはよく wink をする

人がいる。一寸待ってくれ、よしわかったといったような意味から、なあそうだろうと同意を求める事まで、極めて広範囲の意志表示に使われる。ところが異性にウイソクされて自分に気があると早合点したり、同性にそうされて相手はホモ（またはレズ）じゃないかと気味悪がったりする日本人が間々ある。

第2の分野については、上記の第1分野の距離感覚、身体接触および eye contact がこれにあてはまっている。また日本女性がおかしさのためなく、てれ、はずかしさ、ためらいその他色々の感情を表現するのに軽い笑い声を出すことについては、本誌 No. 43, 1973 年秋号に「OHOHO 現象」と題した小論を掲載していただきたいので、それを御参考願いたい。次にこれは言葉そのものよりはむしろ para-linguistics の問題だと私は見たいのだが、日本人が“Yes”の適当でない使いかたをすることで、ふたつの場合がある。ひとつは既に度々指適された事だが、相手の言ったことがわかつてもわからなくても返事がわりに“Yes”と言うことだ。考えて見ると洋服店か何かで「これ1割くらい値段を引いてくれませんか」と言う客に対して、主人が「ハイハイ、いやー、そのお値段ではどうも」などというやりとりが成り立つ。この「ハイハイ」に相当するような軽い意味は英語の Yes にはない。もうひとつの場合は、特に中年以上の男性に多いようだが、相手のアメリカ人が何か説明したりしている時に、日本語の「えーえー、はいはい、うんうん」に相当する“Yes, yes. Um hum.”を連発することで、これはアメリカではとても annoying と感じられる。

Para-linguistic などの例をもうひとつあげよう。それは日本人の、特に中年以上の男性の中に、上下の歯を軽く合わせ、息を吸い込んで「スー」という音を立てる人があることだ。語や文の終りにそうして、相手に対する敬意とか愛想を表現するものと考えられ、昔は商家の人などがよくやったものだ。いま時そんなことをする人はいないと思われるかも知れないし私もそう思っていたのだが、それが伝統的習慣であった日本にいると気がつきにくいくらいらしい。ところがアメリカにおいて、日本から来れる人が英語を話している時にそれをやるとすぐ気がつく。アメリカ人はそれがどういう意味合いを持っているのか見当もつかないらしく、あとで私にそっと「あの人は歯が悪いのか」と聞いた人があった。

日本人、とくにこれも男性に多いようだが、何かしきじったりてれたりした時に、頭をかいたり手を首のうしろにまわしたりする人がよくある。これもアメリカ人にとっては奇妙に見えるが、その意味は察しがつくらし

い。アメリカ人が顔をしかめて頭をかくのは「これは難問だ」、「どう考えてもわからん」といったことを意味する。また「しまった」という気持を表現するには、手のひらを縦にして下から上へひたいをビシャリとたたく。所かわれば品かわるである。

以上のすべては文化の相違によって起こるどうしようもないすれ違いだが、第3の分野、つまり外国の身ぶり言語が不自然に身につくのは人為的なもので、心構えによっては防ぎうる性質のものだ。と言うのは、とかく大きさになりがちな外国の身ぶり言語は、外国においてはその土地の人こっこいに見えるし、日本に帰ってから使うと外国かぶれと見なされるしで、好ましいものではない。たとえば両手をひろげて肩をすぼめる「知らないよ」とか「わからないなあ」などという意味を表現する外国のしぐさは、よく日本人が真似するのだが、何となく手のひろげかたや肩のすぼめかたが大きかったり、肩と手の動作が釣り合わなかったりして、おかしい格好になることが多い。郷に入つては郷に従えとは言うものの、そして身振り言語は communication の重要な手段のひとつではあるが、使いかたがまずいと下手な発音や誤ったイントネーションなどと同様にむしろ communication の障害になる。

教育現場の先生がたにとては、身ぶり言語は外国语の発音や文法などを教えるよりもっと難かしい事だと思われる。その点、最近身ぶり言語に対する関心が高まって来たのはまことに喜ばしい。今後この面での研究が進み、教育現場にもその成果が取り入れられるようになることを願つてやまない。（ミシガン州立大学準教授）

(p. 24 からつづき)

He paused briefly, supported on the high bar, to change the position of his fingers.

Erich Kästner, *The Little Man and the Little Miss*
(English translation)

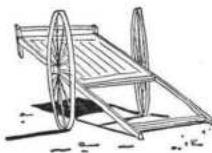
これを日本語にするのも難しいが、その訳文を英語にもどすのは、筆者などには絶望的である。しかし、このような例をあつめて整理して行けば、なんとかなるようにも思える。

とにかく、まだ身近なところに勉強すべきことが残っているように思うのである。

(神戸市外国语大学助教授)



身振り

KUNIHIRO TESTUYA
國廣哲彌

身振りを使う量、その内容が文化によりいろいろと異なっていることは、いまはよく知られている。イタリア人が話しをするときに身振りをよく使うことは有名で、かれらが手を螺旋状にクルクル回しながら喋るさまは英語で‘spiraling’と呼ばれている。先年イタリアを旅行したとき、ボロニア(Bologna)のバスの中でおかみさんといった感じの人がまさにこの‘spiraling’をやりながら盛んに喋っているのを目撃して、微笑を禁じえなかった。ハワイの街角で二世以下の人人が立ち話をしている場合、遠くでその言葉が聞こえないときでも二世から日本から来た人かは身振りで分かることがある。表情がわれわれから見れば大げさであり、相手の話しに心感したり驚いたりしたときは上半身をのけぞらせるようするのである。ハワイ大学で筆者が出席していたあるクラスに、よく質問をするアメリカ女子学生がいた。彼女が質問するときは両手を前に突き出して振ったり首を振ったり眉をしかめたりしながら大歎弁をふるうのが常であった。アメリカの女子学生がすべてこういうふうであるわけではないが、日本の大学の教室ではこういうことは皆無といってよい。

同じような身振りが文化によって異なる意味を持っていることがあるのもよく知られている。「あごを出す」といえば「疲れ切った」という意味であるが、R. L. Stevenson, *Treasure Island* に出てくる次の1節では「怒った態度」のことである。

The squire, at this, would turn away and march up and down the deck, chin in air. (研究社版 p. 70)

「あごをなでる」といえば「内心得意に思っている」ことであるが、「rub one's chin」はそういう意味を持っていないだろう。このほかにも身振りに託して感情の状態を表現することは多いが、今は深入りしないことにする。

このような身振りについて組織的な観察をしようとする場合は、広義に考えて、表情・手ぶり・体の姿勢・相手との体面角度・視線・体への接触・対人距離なども考慮に入れるのがよいであろう。これを最近用いられるよ

うになった英語の呼び名によってまとめれば次のようになる。

Kinesics	Facial expression (表情)
	Gesture (身振り)
Proxemics	Posture (姿勢)
	Distance (対人距離・対面角度)

人間の伝達行動は音声経路と非音声経路の2つの経路(channel)を通して行なわれるが、上記の広義の身振りはこの非音声経路のことである。音声経路はさらに言語経路と非言語経路に分かれ、後者には声の質、大きさ、高さ、話しの速度、声の抑揚などが含まれる。学者の中には音声の非言語的な面と非音声的経路を通すものを一緒にして‘paralinguistic’と呼ぶ人があるが、筆者の考える体系では音声の非言語的な面のみを‘paralinguistic’と呼ぶ。筆者と同じ考えは Wardhaugh (1972) にも見られる。

社会的行動の一つである伝達行動は上記の音声・非音声の両経路にまたがって行なわれる。ある特定の意味を伝えるのにその両経路をどのような割合で用いるかは文化により異なりうる。たとえば敬意の伝達をする場合、日本語文化では言語経路に重点がかかるとしていて、敬語組織なるものが発達している。実際はこれに表情、声の調子などが加わる。一方英語では言語経路を用いることはけっして皆無ではないが、日本語よりは比重が軽くなっている。言語以外の経路の用いかたはおそらく日本語よりは多いと思われる。表情の点は確かに日本人よりは割合が多い。日本人の場合、口では敬語を用いながら、表情には敬意が全く表われていないというちぐはぐな場合が少なくない。日英語の敬意の表現では経路の使いかたの割合が異なるだけで伝達される敬意の総量は変わらないのか、それともタテ社会の日本の方が敬意の量が多いのか、今後の考察にまたなくてはならない。

身振りの研究のためには、一般の科学的研究におけると同様に、分析の単位を定めなければならない。これは Birdwhistell (1970) によって一応なされている。たとえば唇の動きについては次の区別がなされている。

slow lick, quick lick, moistening
lips, lip biting, whistle, pursed
lips, retreating lips.

これにさらに「への字」の唇も加えることができる。身振りを単位に分析した段階で注意すべきことは、Birdwhistell も繰り返し強調しているように、同一の文化内でも、同一の身振りが常に同一の意味を伝えるのではない、ということである。多くの場合、幾つかの単位的身振りが組み合わさって生じるが、それは特定の場面と結び付いて始めて具体的な意味を帯びてくるわけである。同一文化内においてさえそうであるから、文化が異なれば同一の身振りの意味は一層異なりうると考えなければならない。

このように、身振りは言語表現や場面と密接に結び付いて機能するものであるから、その観察は常にそれらを総合的にとらえなければならない。Birdwhistell は高速度映画によって身振りの顕微鏡的な観察を行なった人であるが、その Birdwhistell も身振りの観察には、よく訓練された人間の目が一番適しているといっている。人間の目は総合的観察が可能であるためであろう。身振りの観察資料として映画やテレビドラマを用いることがある、この場合すこし注意が必要ではなかろうかと考える。日本の場合、筆者の見るところでは、自然の場合とちょっと異なり、人物は喋りすぎ、表情も豊かすぎるくらいがある。映像芸術としては当然ではあるが、われわれは芸術的変形に惑わされないようにしなければならない。外国映画について観察する場合も同様に注意すべきであろう。現実とのずれの実体が明らかになるまでは、できれば自然の状態のみを観察すべきであろう。

「自分」を指すのに東洋人が人指し指で自分の鼻先を指し、西洋人が指をそろえて自分の胸を指すことは周知のことである。この東洋人の身振りが非常に古い時代からあったらしいことは、「自」という漢字が今は ‘self’ を表わしているが、元来は ‘nose’ の象形文字であったことを見れば分かる。自分を指すのに鼻を指していたので鼻を意味する漢字が「自分」を意味するようになったわけである。「自」が鼻を意味していた時代に作られた漢字に「臭」がある。この字は旧字体では「自」の下に「犬」を書いたのである。犬は鼻がよくて、よくにおいをかぐので「犬」と「自」(=nose) を合わせて「におい」の意の字を作った。「自」が自分も意味するようになってから混同を防ぐために ‘nose’ には「鼻」を用いるようになったわけである。

挨拶の身振りとして東洋人はお辞儀をしたり、合掌したりするが、西洋人は握手、抱擁、接吻、背中をたたく

ことなどをする。両者の違いは互いの体に接触するかしないかというところにある。日本人は仏様に対してのみ合掌をするが、東南アジアの仏教国では合掌は普通の人間に對してもなされる普通の挨拶の身振りである。普通の日本人は初めて合掌の挨拶をされると、仏様に昇格した錯覚を起こしそうになるだろう。握手については、大昔、手に武器を持っていないことを示す身振りだったのだとする説があるが、にわかに信じがたい。

Birdwhistell は‘gender signal’(性別信号)を問題にしている。姿勢、体の動かしかたなどによって自分が男性か女性かを示すことである。服装も重要な信号であるが、今は触れない。身振り上の着眼点は第 1 に椅子に腰を下しているときの両腿の開き工合 (intrafemoral angle) である。アメリカ女性の場合は零度、つまりぴったり合わせていると観察されているが、日本の若い女性の場合も同様と思われる。男性では日米共に多かれ少なかれ角度が付く。日本の中年以上の女性の場合、電車・バスの中で見る限りでは多少角度が付く傾向があるが、これは女性信号を出すことを放棄したのだと解してよいのだろうか。第 2 の着眼点は足の組みかたである。アメリカの場合、男性はくるぶしを反対側の足の膝の上にのせる ‘ankle-over-knee’ 式と膝と膝を重ねる ‘knee-over-knee’ 式の両方を用いるが、女性は後者のみを用いると観察されている。日本でも同じと見てよいであろう。

対話をする際の対人距離の基準が文化によって異なることは Hall (1965) に説かれているところであるが、ここに関連して注意すべきは、個人のまわりを囲む目に見えない私的領域 (invisible bubble) のことである。英語に次のような表現がある。

Get your face *out of mine!* (顔をもっと放してくれ)

He shook his fist *in my face.* (彼は私の目の前でげんこつを振った)

ここで用いられている ‘face’ は顔そのものではなく、顔の周囲を包む「私的領域」のことであると解することにより、上の表現はよく理解できるであろう。

文 献

Birdwhistell, Ray L. (1970), *Kinesics and Context: Essays on Body Motion Communication*. University of Pennsylvania Press.

Hall, Edward T. (1965), *The Hidden Dimension*, Doubleday.

Wardhaugh, Ronald (1972), *Introduction to Linguistics*, McGraw-Hill.

(東京大学助教授)



ジェスチュアの調べかた

NAKANO MICHIO

中野道雄

英語研究の一環として、英語国民のジェスチュアをどのように調べて行けばよいか、実例に即して2、3のポイントを指摘してみたい。

1. To make a warning gesture

ASSUNTA: But here what's he o?

Drives a truck of bananas?

SERAFINA: [blurtling out]: No! Not bananas!

ASSUNTA: Not bananas?

SERAFINA: Stai zitto! [She makes a warning gesture.]

—no—Vienqui, Assunta! [She beckons her mysteriously. Assunta approaches.]

T. Williams, *The Rose Tattoo*

(アスンタ:「だけど、こちらじゃあなにをしていなさるのかい? バナナ運ぶトラックの運転手じゃないのかね?」)

セラフィナ:(口をすべらせて)「ちがうよ! バナナなんかじゃないのさ!」

アスンタ:「バナナじゃないって?」

セラフィナ:「しっ! 声が高いよ! (いましめるみぶり) いけないよ。もっとお寄り、アスンタ!

(謎めかしたふうにそばへ寄れと合図する。アスンタは近づく。)

さて、この例で、warning gesture とはどんなジェスチュアであろうか。このようなことは辞書をひいたらわかるといった性質のことではないので、けっきょく自分で、映画を見たり、読書をしたりするときに気をつけている他ない。そうすると次のような例に行き当たる。

Before leaving the room with Gabriel she signalled to Mr. Browne by frowning and shaking her forefinger in warning to and fro.

James Joyce, "The Dead"

(ガイブリエルといっしょに部屋を出る前に、彼女は、眉をひそめたり、人差指を振ったりして、用心なさいと合図した。)

また、筆者が、ヨーロッパのどこであったか大寺院

で、見学に疲れて、柱の礎石にどっこいしょと腰をおろしていると、通りかかったお坊さんが筆者私の方に向けて、人差指を左右に振ってみせた。これが「いけませんよ」という意味らしいとわかるのには10秒位かかったけれど、このような経験を経て、最初の例で warning gesture というのは、指を振ることではないかと推定できるようになるのである。(ただし、warning gesture はこのひとつに限らず、また指を振ることからはずしても warning gesture とも限らないことを付言しておく必要があろう。)

2. To beckon

次に、最初の例で、to beckon とあるのはどのようなジェスチュアであろうか。辞書には次のように説明されている。

To signal (someone) to approach with a movement of the head or hand. (*Holt Intermediate*)

そこで気を付けていると、次のような例に出くわす。

Taplow looks at him over an imaginary pair of spectacles, and then, very quietly, crooks his forefinger to him in indication to approach the table.

T. Rattigan, *The Browning Version*

(〔ト書き〕タプロウは、かけたふりをしているめがねごしに彼の方を見る。それから静かに、人差指をかぎ形に曲げて、テーブルの方へ近づくよう指示する。)

ただ、この例でも、掌を上にしているというところまではわからない。英語国民にとってはそんなことは当たり前だから書いてないのであろう。さいわい、このジェスチュアは、映画などでも、しばしば見かけることができる。動かすのは、人差指1本とは限らず、他の指もそろえて振る場合、ひじから先を振る場合もある。また辞書に with a movement of the head とあるのは、次のような例の場合をさしている。

He ordered me into a bedside chair with a two-inch jerk of his round head, chased the secretary away with another.

D. Hammett, *Red Harvest*

(彼は、丸い頭を2インチ程しゃくって、私に、ベッドのそばのいすに坐るよう命じ、もうひとしゃくりで秘書を追っぱらった。)

3. To twiddle one's thumbs

次に、ジェスチュアとイディオムの関係について考えてみよう。

'I shall be carrying a large amount of money and it is not my money.' I'm acting for a friend.

I snubbed out my cigarette and leaned back in the pink chair and twiddled my thumbs.

R. Chandler, *Farewell, My Lovely*

〔私は大金を運ぶのです。それは他人の金です。友人の代理なのです。〕

私はたばこをもみ消すと、ピンク色のいすにそりかえって、親指をくるくるまわした。)

この to twiddle one's thumbs というのはどういう動作であろうか。(実は、こんなことは、すでに大正時代の英語雑誌(『英語界』大正11年3月号)に、ちゃんと絵入りで説明されているのであるが。)これは、両手の親指以外の指を軽く組み合わせ、掌を上にして、親指どうしを、たがいに追いかけるようにくるくるまわす動作である。手持ちぶさたなときのしぐさとされている。そして、手持ちぶさた、あるいは無為な状態を表わすためには、実際にこの動作をしていなくても(つまりイディオムとして)、この表現が用いられることがある。次の例はその場合である。

MILLIE: And what did you say? Just say there and made a joke in Latin. I suppose?

ANDREW: There wasn't very much I could say, in Latin or any other language.

MILLIE: Oh, wasn't there? I'd have said it all right. I wouldn't just have sat there twiddling my thumbs and taking it from that old phoney of a schoolmaster.

T. Rattigan, *The Browning Version*

(ミリイ:「それで、あなたは何をおっしゃったの? ただ、そこに座って、ラテン語のしゃれでもおっしゃっていたのかしら?」)

アンドルー:「何も言えることはなかったさ、ラテン語であろうと何語であろうと。」

ミリイ:「あら、そうかしら? 私だったら、ちゃんと言っていたわ。あのおいぼれのインチキ校長から、ただほんやりと言われっぱなしななんてこと

はなかつたでしょうに。」)

4. To stick out one's chin

このような習慣的なみぶりとイディオムの関係は次の例にも見られる。

And now at last, brave girl though she was, her heart quailed. Supposing the others weren't there! Supposing the ghosts were! But she stuck out her chin (and a little bit of her tongue too) and went straight towards them.

C. S. Lewis, *The Horse and the Boy*

(そして、彼女は勇敢な女の子であったけれど、ついに、心臓がどきどきしだした。仲間たちが来ていなかつたらどうしよう。だけど、彼女は、あごを(そして、ちょっぴり舌を)突き出して、その方へまっすぐ進んで行った。)

To stick out one's chin というのは、敢然と立ち向かう、といった気持ちを表わす表現である。この例では、実際に行なわれた動作であろうが、同時に、このような場合に慣用的に用いられる表現だということも知つておく必要がある。

5. 動作の描写と作文

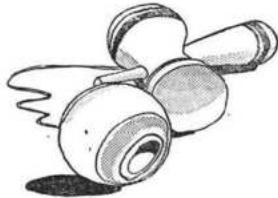
作文の立場から言えば、ジェスチュアというより、むしろ、ごくふつうの動作を的確に描写するということがなかなか難しい問題となる。イギリスのアバクロンビー教授も「身振りをはっきりと言葉で記述するのはむずかしい」と述べている。(宮田齊・田辺洋二訳『英語教育の原理と問題』p. 114)

筆者は、日本語を英語に翻訳する仕事にいくらかたずさわってきたが、一番てこずったのは、最新の科学文献でなく、詩や俳句でもなく、柔道を解説する本の場合であった。(たとえば、「巴投げ」という技を、英語でこまかく説明することを考えてみていただきたい。)次の例は、鉄棒の演技の描写である。

The Little Man was hanging full-length from the horizontal bar! ... Maxie hung there motionless for a while. Then he slowly raised his legs to a horizontal position, brought his feet from their extended forward position by bending his knees and bringing them through his arms, then shoving his legs up vertically. Then he made a big swing forwards, then another backwards, made an "uprise" and then a complete forward circle of the bar on his middle.

(p. 20 へつづく)

基礎語彙について (2)



HATTORI SHIRÔ
服 部 四 郎

6.3. 前述の国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字』の『第三分冊』において、著者(水谷静夫氏)は「語の基本度」(p. 7, ff.)なるものに関する調整を試みている。

それに先立ち、著者は、次のような定義を示している。

(0) 様々の言語表現によく現われる(見出し)語を組として考えたものが基本語彙である。

(1) 「よく現われる語」だということは、基本語彙という集合 S に属する元である任意の見出し語 u と、 S に属しない見出し語 v について、前者の使用率が後者のそれより(概して)大きい事を含意する。

(2) 「様々な言語表現に現われる語」だということは、特殊な分野にだけよく使われるのでなく(概して)広く満遍なく使われるような語であることを含意する。

(3) 各見出し語にはそれぞれに、その語を基本語彙に属せしめるか否かを決する手掛りとなる、かつ一次元の尺度で表わせる、ここで「基本度」と呼ぶ量が対応する。その基本度は、少なくとも二つの変数、すなわちそれぞれ性質(1), (2)にかかる量的表示である「使用率」「散らばり」度の函数として決定できる。

このようにして著者は、使用率を P 、散らばり度を Sc 、「適当に定義した基本度函数」を ϕ 、基本度を f で表わすと、基本度は、

$$f = \phi(P, Sc)$$

という式で計算できる、として、使用率上位の 1,220 語について、基本度を算出している(p. 26, ff.)。

このようにして獲られた「基本度順位」(F) と、先に問題にした「使用率順位」(P) との差異を見ると、次のようである。

P が 15 位以上で F が 16 位以下のもの。

P	F	差	
8	20	12	= (二)

13 17 4 ジュウ (十)
14 19 5 サン (三)

P が 16 位以下で F が 15 位以上のもの。

P	F	差	
17	15	2	ソレ [指]
20	8	12	キ・クル
27	14	13	ミル

P が 16~59 位で F が 60 位以下のもの。

P	F	差	
34	73	39	メ (目・眼)
40	66	26	エン(yen)
44	85	41	ヒャク (百)
45	93	48	マン (万)
47	72	25	レイ (零)
48	65	17	カタ (方)
49	69	20	ガツ (月)
54	80	26	マエ (前)
55	83	28	ゴジュウ (五十)
56	60	4	タチ [接尾]
57	71	14	ヨ(シ)(四)
58	75	17	カレ (彼)

P が 60 位以下で F が 16~59 位のもの。

P	F	差	
60	51	9	タメ (為)
63	32	31	イマ (今)
64	46	18	デル (出)
68	43	25	ホウ (方)
69	58	11	シマイ・ウ
70	49	21	ドウ [指]
71	45	26	トリ・ル (取・撮)
72	42	30	モチ・ッ (持)
73	54	19	ティ (度)
78	59	19	ニン (人)
118	55	63	ド (度)
145	50	95	ソウ (相～そうだ、を含む)

すなわち、この調整の結果、§ 6.1. (本誌 No. 46, p. 34 ff.) で取扱った100語のうち60位以下(すなわち、助詞・助動詞を含めた場合の101位以下)に脱落したものにはヒャク(百), マン(万), レイ(零), ゴジュウ(五十), ヨン(四)の5つの数詞が含まれているのが目立つほか、実詞的名詞 メ(目)が73位に落ちているのが注意される。逆に、前回の100語の中には含まれていなくて59位以上に上ってきたものには、イマ(今)のような副詞、ホウ(方), タメ(為), ソウ(相)のような形式名詞あるいはそれに近いもの、タイ(度), ニン(人), ド(度)のような接尾辞、ドウのような指示詞、のように「文法的」な記号素が多く、ただ、モツ(持), デル(出), シマウのような動詞が注目されるが、特にシマウは補助動詞としての頻度が高いであろう。

これを要するに、この調整にもかかわらず、助詞・助動詞を加えた全体の順位100位までのものには、「文法的」な単語(記号素)が圧倒的に多いという全体的傾向に変わりはない、と言えよう。

因みに、この調整の結果、順位が著しく上がった点で注目されるものに、次の単語(記号素)などがある。

P	F	差	
20	8	12	クル(来)
27	14	13	ミル(見)
50	33	17	トコロ(所)
72	42	30	モツ(持)
63	32	31	イマ(今)
117	85	33	ヒツ(一)
120	78	42	オナジ(同)
118	55	63	ド(度)
167	97	70	アマリ〔名・副〕
192	120	72	マダ(未)
144	67	77	サセル(令為)
211	134	77	シゴト
181	89	92	トモ(共・偕)
145	50	95	ソウ(相)
197	102	95	ジカン(時間)
248	136	112	カカル(罹・懸・掛)
271	158	113	イチバン(一番)
209	81	128	ツヨイ
298	168	129	カワル(変・代・替)
385.5	186	199.5	モシ〔副〕
445	194.5	249.5	サイゴ(最後)〔最期は別〕
921	183	738	ズイブン

6.4. さて、上述の『第3次基礎語彙調査表』で最も基礎的とした457項目と、国立語研究所および Thorndike の調査結果とを比較する段取りとなつたが、その全体について述べるとあまり長くなるので、注目すべき点だけを挙げるにとどめざるを得ない。各項目に関しては、次の順序で記す。

- [1] 『第3次調査表』における項目番号.
 - [2] 問題の単語(日本語).
 - [3] 国立国語研究所の統計による使用率(%) (一はその語が表に見えないことを示す).
 - [4] 同じく使用率による順位(助詞・助動詞を除く). 原著者は1220位で一区切をつけているので、本稿でも1220位より上位のものの順位数は太字で示すこととする.
 - [5] 次に()に入れて、助詞・助動詞を加えた全体の使用率による順位を示し、そのうち1070位と2021位との間にあるもの(すなわち Thorndike のAに当たるもの。次の[9]参照。)を太字で示す。その理由は § 6.4.2. に述べるところにより明らかとなる。2022位以下のものは、助詞・助動詞の総数94をそれに加えればよいのだから、省略して示さない.
 - [6] 同じく基本度による順位. 著者は1220位までしか示していない.
 - [7] M. Swadesh の調査表における項目番号(0は第1回の調整で省かれたもの、201以上は第2回のそれで省かれたもの、一は Swadesh の表にないもの).
 - [8] Swadesh の表に示された単語(英語). 該当の単語が彼の表に含まれていない場合は、[2]の日本語に当たる英語を示す.
 - [9] 前項の英語の Thorndike における頻度数. AAは100万語の中に100回以上出るもの。1069語ある。Aは同じく50回ないし99回出るもの。952語ある。49, 48, 47, ……の数字はそれぞれ100万語中に現われる回数を示す.
 - [10] AA および A の単語については Lorge の magazine count における頻度表を()に入れて示し、その他の単語については、筆者の計算した全体中の順位を〔 〕に入れて示す.
- 人体の部分の名称については、本誌 No. 43 (1973年10月) の拙文「日英両国語基礎語彙の比較」において多少取扱ったので、ここではその一部分について述べるとどめる。

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	[8]	[9]	[10]
1.	アタマ	0.435-	269	(327)	257	38.	head	AA	(5047)
22.	カオ	0.963	109	(158)	135	—	face	AA	(3902)
3.	メ	2.665(目・眼)	34	(70)	73	40.	eye	AA	(5786)
7.	ハナ	0.098	1396.5	(1490.5)		41.	nose	AA	(478)
8.	ミミ	0.171	772.5	(849.5)	760	39.	ear	AA	(595)
10.	クチ	0.393	309.5	(372.5)	320	42.	mouth	AA	(699)
11.	クチビル	0.082	1655.5	(1745.5)		130.	lips	AA	(921)
14.	ハ	0.037	3469			43.	teeth	A	(405)
							tooth	47	(61)
12.	シタ	0.027	4425			44.	tongue	A	(201)
21.	アゴ	0.046(頬・顎)	2863			{—	chin	27	[3201位以上]
						{—	jaw	11	[5750位以上]
18.	セキ	0.023	5158.5			—	cough	18	[4162位以上]
19.	クシャミ	—	—			—	sneeze	6	[8332位以上]
20.	アクビ	—	—			—	yawn	15	[4711位以上]
53.	チ	0.130	1042.5	(1124.5)	981	30.	blood	AA	(504)
54.	ホネ	0.057	2333.5			31.	bone	A	(393)
55.	ニク	0.066	2027			—	flesh	A	(179)
51.	アセ	0.071	1911	(2005)		—	sweat	19	[4017位以上]
52.	アカ	—	—			{—	dirt	21	[3754位以上]
						{—	filth	4	[10286位以上]
50.	ウミ	—	—			211.	pus		—
15.	ツバキ	—	—			{—	saliva	3	[11728位以上]
						{—	spittle		—
						{—	spit	13	[5142位以上]
57.	ミル	3.393	27	(63)	14	57.	see	AA	(9991)
58.	カグ	—	—			187.	smell	A	(280)
59.	キク	1.032(聞・訊)	96	(144)	107	58.	hear	AA	(3006)
60.	ワラウ	0.271	460	(532)	492	0.	laugh	AA	(1768)
61.	ナク	0.155(泣・鳴)	865	(943)	995	0.	cry	AA	(736)
63.	キモノ	0.155	865	(943)	1005	{0.	clothing	A	(200)
						{clothes	AA	(1207)	
64.	キル	0.322	378.5	(448.5)	538	{—	put on		
						{—	wear	AA	(950)
65.	ヌグ	0.044	2999.5			—	take off		

国立国語研究所の語彙表には、標本使用度数が7以上の見出し語がすべてあげてあり(『第一分冊』p.21), 助詞・助動詞は94語, それ以外が約7200語であるから, 上の19. クシャミ, 20. アクビ, 52. アカ, 50. ウミ, 15. ツバキは7300位以下ということになる。そのほか, 34. チプサ, 37. ハラワタ, 39. ヘソ; 6. メクラ, 9. ソンボ, 13. オシ, 46. ピッコが無く, カタワもない。

Thorndikeの場合にpusとspittleが出て来ないのは, Part Iの表であって, Part IIには出て来る。前者は

100万語に1回あるいはそれ以上現れる単語をalphabet順の表にしたもので, 19440語より成り, 後者は, それよりも頻度が低くかつ1800万語に4回以上現れる単語をalphabet順の表にしたもので, 9202語より成る(p. x)。

上に示した人体部分名称の諸単語が基礎語彙に属するとなれば, 基礎語彙はこの種の統計的研究によっては明らかにし得ない面がある, とせざるを得ないであろう。

57. ミル, 59. キクに対して60. ワラウ, 61. ナクは使用率が著しく低い。英語のlaughはそれほど低くない。

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	[8]	[9]	[10]
71.	タペモノ	0.018	6146.5	(538.5)	580	—	food	AA	(1283)
	タベル	0.267	466.5	(704.5)	531	55.	eat	AA	(1188)
	クウ	0.205	629.5			—	lick	22	[3642位以上]
	ナメル	0.023	5158.5			—	chew	14	[4911位以上]
	カム	0.032	3888.5			54.	drink	AA	(981)
	ノム	0.301	411	(482)	427	189.	suck	15	[4711位以上]
	スウ	0.027	4425			{ 188.	puke	—	
	ハク	0.032	3888.5			{(188.) vomit		4	[10286位以上]
96.	イエ	0.678	162	(213)	163	—	house	AA	(4231)
	ウチ	0.219	591	(666)	565				
	タテル	0.322 (立・建)	378.5	(448.5)	314	—	build	AA	(306)
	ト	0.059	2248			—	door	AA	(2511)
	カベ	0.068	1969.5			—	wall	AA	(1122)
	ヤネ	0.055-	2419			—	roof	AA	(417)
	ヒ	0.171	772.5	(849.5)	828	82.	fire	AA	(1319)
	ケムリ	0.023	5158.5			81.	smoke	AA	(545)
101.	ハイ	—	—			83.	ash	37	[2535位以上]
	アルク	0.377	319	(382)	327	65.	walk	AA	(2084)
	ハシル	0.210	618	(693)	694	—	run	AA	(1643)
	ハウ (這)	—	—			—	crawl	31	[2888位以上]
	オヨグ	0.025	4757.5			63.	swim	A	(281)
	アソブ	0.126	1075		986	209.	play	AA	(2606)
	ウタウ	0.210	618	(693)	614	186.	sing	AA	(472)
	オドル	0.119	1147.5		1015	0.	dance	AA	(1168)
239.	スレル	0.046	2868			122.	wet	A	(319)
	カワク	0.052	2512.5			99.	dry	AA	(592)
250.	ソラ	0.137 (空・虚)	973	(1055)	972.5	114.	sky	AA	(347)
	クモ	0.075	1799.5	(1891.5)		80.	cloud	AA	(376)
	アメ	0.164	804	(882)	579	121.	rain	AA	(372)
	ユキ	0.098	1396.5	(1483.5)		149.	snow	AA	(372)
	コオリ	0.037	3465			148.	ice	AA	(428)
266.	アカルイ	0.235	545.5	(619.5)	398	—	bright	AA	(645)
	クライ	0.148	905.5	(987.5)	830	152.	dark	AA	(1005)
270.	アツイ	0.119	1147.5	(1232.5)	1034	{ 93.	hot	AA	(1006)
	サムイ	0.112	1228.5	(1313.5)		{(93.) warm		AA	(718)
271.	ツメタイ	0.123	1096.5	(1181.5)	960	94.	cold	AA	(1092)

特に58. カグ が無いのが目立つ。

「衣」関係の3語 (63.~65.) も、全体が低いが、64.

キル と65. スグ の差の大きいのが目立つ。

86. ノム、83. タベル、(83.) クウ も使用率が非常に高いとは言えないが、他は著しく低い。

99. カベ、98. ト、100. ヤネ の使用率が高くない。

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	[8]	[9]	[10]
273.	ヤマ	0.428	279	(337)	286	86.	mountain	AA	(288)
277.	カワ	0.185-(川・河)	718	(794)	728	76.	river	AA	(455)
283.	ウミ	0.176(海・湖)	753	(830)	772	{ 119.	sea	AA	(595)
						—	ocean	AA	(177)
285.	シマ	0.096	1432	(1519.5)		—	island	AA	(395)
80.	ミズ	0.383	316	(379)	349	75.	water	AA	(2067)
上のうち ocean の117は Lorge magazine count の数字で, Thorndike count of 120 juvenile books では約 700 となっている。これは、アメリカ英語では<海>を意味する単語はむしろ ocean であることを示すものではなかろうか!。									
286.	イシ	0.064	2095			77.	stone	AA	(386)
287.	スナ	0.034	3670			78.	sand	A	(200)
288.	ツチ	0.080	1696	(1788)		76.	earth	AA	(448)
289.	キ	0.100	1365.5	(1452.5)		23.	tree	AA	(942)
290.	クサ	0.041	3150.5			138.	grass	AA	(253)
291.	ミキ	—	—			—	trunk	48	[2092位以上]
293.	クキ	0.025	4757.5			—	stalk	27	[3201位以上]
294.	エダ	0.044	2999.5			—	branch	AA	(254)
295.	ハ	0.082	1655.5	(1747.5)		25.	leaf	27	[3201位以上]
296.	ハナ	0.322	378.5	(448.5)	272	137.	flower	AA	(902)
297.	ネ	0.066	2027			26.	root	A	(227)
301.	トリ	0.037(鳥・鶴)	3469			20.	bird	AA	(386)
302.	サカナ	0.062(魚・肴)	2166			{ 19.	fish	AA	(597)
	ウオ	0.025	4757.5			125.	worm	37	[2535位以上]
303.	ムシ	0.052	2512.5			—	insect	40	[2397位以上]
304.	イヌ	0.098(犬・戌)	1396.5	(1483.5)		21.	dog	AA	(811)
305.	カイ	—	—			—	shellfish	1	[19440位以上]
306.	アリ	—	—			—	ant	38	[2485位以上]
307.	カ	—	—			—	mosquito	8	[7054位以上]
308.	ハエ	0.016	6843			—	fly	AA	(634)
309.	ノミ	—	—			—	flea	4	[10286位以上]
310.	シラミ	—	—			22.	louse	1	[19440位以上]
311.	ヘビ	0.018	6146.5			124.	snake	28	[3113位以上]
326.	オオキイ	1.007	98	(146)	70	{ 13.	big	AA	(1773)
						—	large	AA	(1697)
327.	チイサイ	0.363	330	(395)	410	{ 14.	small	AA	(1818)
						—	little	AA	(8659)
328.	ナガイ	0.445	266	(323)	208	15.	long	AA	(5362)
329.	ミジカイ	0.094	1462	(1551)		160.	short	AA	(882)
330.	アツイ	0.059	2248			158.	thick	A	(443)
331.	ウスイ	0.116(薄・淡)	1177	(1262)		159.	thin	AA	(646)

上の308.の fly には<飛ぶ>その他の意味の単語も含まれている。Michael West の count によれば <蝶>

の意味に用いられるのはそのうちの11%である。

使用率の点からいふと、日本語では、大>小、長>短、厚>薄であるが、英語では大<小、長<短、厚<薄である。ただし、英語の little と long の頻度は非常に高

1) 拙著『英語基礎語彙の研究』、三省堂、昭和43年11月、p. 108, pp. 269, ff.

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	[8]	[9]	[10]
364.	チカイ	0.253	501.5	(574.5)	474	157.	near	AA	(1338)
365.	トオイ	0.187	702.5	(778.5)	733	156.	far	AA	(1835)
366.	タカイ	0.422	282.5	(340.5)	191	—	high	AA	(1674)
367.	ヒクイ	0.137	973	(1055)	550	—	low	AA	(1224)
368.	フカイ	0.347	339.5	(408.5)	287	—	deep	AA	(881)
369.	アサイ	0.032	3888.5			—	shallow	27	[3201位以上]
370.	ヒロイ	0.194	675	(751)	487	154.	wide	AA	(593)
371.	セマイ	0.107	1276.5	(1361.5)		155.	narrow	AA	(391)
376.	アサ	0.233	552.5		534	—	morning	AA	(2015)
377.	ヒルマ	0.023	5158.5			115.	day	AA	(4549)
	ヒル	0.096	1432	(1519)		—	daytime	12	[5436位以上]
379.	ヨル	0.339	353	(422)	387	92.	night	AA	(3385)
424.	ダレ	0.630	179	(230)	196	6.	who	AA	(9307)
	ドナタ	0.052	2512.5			whose	AA	(830)	
425.	ナニ	2.874	32	(68)	36	7.	whom	AA	(793)
426.	ドレ	0.110	1248.5	(1333.5)		—	what	AA	(12461)
427.	ドウ	1.577	70	(112)	49	104.	which	AA	(11183)
428.	ドコ	0.597	194	(245)	193	106.	how	AA	(5197)
[428-2.	ナゼ	0.231	560	(634)	457	107.	where	AA	(4925)
429.	イツ	0.831	130	(180)	129	108.	why	AA	(3896)]
430.	イクツ	0.087	1584.5	(1673.5)		105.	when	AA	(14775)
						—	(how many ~ much)		

い。しかし、<小さい>の意味の little は M. West の count によれば 45% で、空間的に <長い> の意味の long は 26% である。

空間距離形容詞でも近>遠、高>低、深>浅、広>狭という関係が見られるが、英語では near < far である。アサイ と shallow が著しく低い点も一致している。

日本語では ヨル>アサ>ヒル の順序になっている。英語の day には ニチ、カなどの意味がある。M. West の count では <ヒルマ> の意味の day は 9% である。

日本語には、イクツ、ドレ(、ドナタ)のように使用率の比較的低い疑問詞があるのに、英語の疑問詞はいずれも頻度が非常に高い。これを頻度順位によって示すと、次のようになる。

when (37位), what (42位), which (48位), who (51位, whose, whom を含む), how (87位), where (94位), why (118位)

6.4.1 国立国語研究所の統計結果における「[4] 使用率順位」と「[6] 基本度順位」とを比較すると、後者の方が上位となっているものの方が概して多いけれども、下位となっているものもあり、331. ウスイ のよう

に基本度順位 1220 位から脱落しているものさえあるが、総計において大した変化はないと言えよう。

6.4.2 次に、日本語と英語とを比較すると(日本語は [5] の助詞・助動詞を加えた全体の使用率順位を用いる),

日本語	英語
1位～1069位(細字)	43項目
1070位～2021位(太字)	29 "
計 1位～2021位	AA+A 85 "
2022位以下, その他	その他 27 "
総計	112 "
	112 "

すなわち、上に取扱った諸項目に関する限り、Thorn-dike の統計の方が国立国語研究所のそれよりも、われわれが基礎的と認めた単語を高い順位に置いているものが多い、と言える。2022 位以下のものについても、概して同じことが言える。

6.4.3 第1図および第2図(本誌 No. 46, p. 36)の示すように、使用率(頻度)の曲線も、150 位に達する(p. 16 へつづく)



叙実述語 (Factive Predicate)

OTA

AKIRA

太田 朗

本誌45号で前提 (Presupposition) のことを述べた。たとえば次の(1)の文は (1)' のような文が真であることを前提とするというが、その意味は、(1)' が真でなければ(1)の文は真であるとも偽であるともいえない。(1)' が真であることが、(1)が真、偽いずれかの価値をもちうるための条件で、こうした場合 (1)' は(1)の前提となるというわけである。

(1) John has stopped beating his wife.

(1)' John beat his wife.

更に、一般的にいってある文 S' がある文 S の前提となる場合には、S を否定しても S' の真であることにかわりはないということも述べた。たとえば(1)の否定である(2)の文もやはり (1)' を前提とする。

(2) John has not stopped beating his wife.

つまり S' が S の前提となる場合には、一般的に(3)のような関係が S と S' の間に成立するということであった。

(3) S ⊃ S' and not S ⊃ S'

本号では、補文を従える色々の動詞、形容詞の意味解釈に前提ということがどう働くかという問題を扱うこととする。

次の(4), (5)の文を比較されたい。

(4) a. That John attended the meeting is surprising.

b. It is surprising that John attended the meeting.

(5) a. That John attended the meeting is very likely.

b. It is very likely that John attended the meeting.

(4) は John が会合に出席したことが真実であるということを前提とした上で、それが驚くべきことであるといつており、(5) は John が会合に出席したということがありそうなことだといっているだけで、それが真実だということを前提にはしていない。つまり(4)の文は(6)が真であることを前提にしているが、(5) はそうではない。

(6) John attended the meeting.

このことは(4)を否定にして(7)のようにしても(6)が真であることにかわりはないということからもうかがわれる。

(7) a. That John attended the meeting is not surprising.

b. It is not surprising that John attended the meeting.

(4a), (5a) は that 節が主語の位置に来ている構造で、これが深層に近く、(4b), (5b) はそれに外置変形 (Extraposition) が加わってできたものと説明するのが普通である¹。そこで surprising, likely のように、主語の位置に補文をとりうる述語 (動詞、形容詞) を、surprising のごとく補文が真実であることを前提とする叙実述語と、likely のごとくそうでない非叙実 (nonfactive) 述語とに分けて示せば、(8) のようである。

(8) a. 叙実 : significant, odd, tragic, exciting ; matters, counts, makes sense, amuses, bothers.

b. 非叙実 : likely, sure, possible, true², false ; seems, appears, happens, chances, turns out.

叙実と非叙実の区別は、補文が主語の位置に来た場合に限らない。(9), (10) はそれぞれ補文が目的語の位置に来た場合の叙実述語と非叙実述語を示す例文である。

(9) a. John regrets that he did not work harder.
b. John knows that his wife is sick.

(10) a. John thinks that his wife is sick.
b. John believed that Mary was honest.

(9) はそれを否定にした(11) と同様(12) が真であることを前提とするが、(10) についてはそんなことはいえない。

1. これには Emonds (1970) のような異説もあるが、どの説をとっても、これから述べることに実質上の影響はない。

2. (i) It is true that he attended the meeting は (ii) He attended the meeting が真であることを断言 (assert) しているので、それを前提にしているのではない。従って論理上は (i) と (ii) は真理価値を同じくする同意表現であるが、実際の会話ではこの 2 つは全く同じ意味であるとはいえない。

(11) a. John does not regret that he did not work harder.

b. John does not know that his wife is sick.

(12) a. He did not work harder.

b. His wife is sick.

(13)の pretend という動詞も叙実述語であるが、ただ pretend の場合は補文の否定を前提とする。すなわち(13)の前提は(14)である。

(13) John pretended that he was rich.

(14) He was not rich.

目的語の位置に補文をとる述語を叙実と非叙実とに分けて示せば(15)のようになる。

(15) a. 叙実 : regret, resent, deplore, know, be aware, realize, learn, remember, forget, understand, see, hear, ignore, make clear; pretend.

b. 非叙実 : suppose, assume, hope, think, assert, claim, maintain, believe, be sure, conclude, doubt, deem.

(8b) のリストと(15b)のリストを見ると、多少の例外はあるが、(8b)の方は補文に述べられていることからの可能性、蓋然性、確実性を示す表現が多く、(15b)は主語の名詞（これは人間である）が、補文に述べられていることからの事実性を主張するか、あるいはその事実性に関する確信の程度を示すものが大部分である。つまり(8b), (15b) 各々の中でリストされている述語相互の間に意味上共通性があるだけでなく、(8b), (15b)の間にも意味上共通性がある。そしてどちらの場合にも補文に述べられていることがらが事実であるという前提はない。これに対して(8a), (15a)にリストされた叙実述語の場合には、補文に述べられたことがらが事実であるという前提を必要とする。

叙実述語の場合に必要なこの前提是、叙実述語を含む文が真、偽いずれかの真理価値をうるためにには、こうした前提を必要とするという論理的な意味合いを本来は有するものであるが、話者、聴者を含む実際の言語使用の場では、叙実述語に依存する補文のあらわしていることがらが事実であると認定するのは通例話者であるとされる。たとえば前述(4a), (7a)はともに(6)が真であるという前提に立つが、実際の言語使用の場で(6)が真であると認定するのは話者であるとされる。同様に(9b), (11b)は(12b)が真であるという前提に立つが、話者、聴者を含む実際の言語使用の場で(12b)が真であると認めている責任者は話者であるとされる。

そうすると(16a, b)は意味上おかしなことになる。

(16a, b)は、それぞれ(17a, b)が真であることを話者が認めているという前提に立っているにもかかわらず、主節で話者はそれを否定することになるからである³。

(16) a. I don't know that Mary is honest.

*b. I don't realize that he has gone away.

(17) a. Mary is honest.

b. He has gone away.

しかし(16b)はたしかにおかしいが、(16a)はそれ程おかしくない。実際に(16a)が使われる場面を考えて見ると、たとえば、(i) 誰かが Mary is honest といったのをうけて、「さあどうだか」といった気持でいう場合とか、(ii) Mary は余り正直でないと思っているが單刀直入に Mary is not honest. というのを避けてえん曲にいう場合とか⁴が考えられる。これらの場合、前提とは、補文が真であることを話者が認めているということだと解釈すると動きがとれなくなる。これに反して、叙実述語を含む文が、真、偽いずれかの真理価値をうるためにには、補文が真であるということを前提とするという論理的意味に限定すれば、それほど不都合は生じない。要は、「この文にはこうした前提がある」と考えるか、「この文について話者はこうした前提をもつ」と考えるかの違いである。この点について諸学者の意見は一致していない。上の議論だけからは、厳密に論理的意味に限定して「前提」という語を使った方がよいように見える。しかし本誌 No.44 で扱った「焦点と前提」では、話者、聴者が共有する情報、理解が前提で、それに話者がつけ加える新情報が焦点であるというように、話者、聴者を引き合い出して規定している。焦点に対立した意味での前提と、本稿で扱っているような断言(assertion)に対立した意味での前提とは確かに違った点がある。前者は文の真理価値とは別の問題であるのに対し、後者は真理価値に関係する問題であるからである。従って人によっては「前提」という術語を後者の意味のみに使い、前者に対しては別の術語を提案している。しかしこの 2 つの前提が全く無縁であるとはいえない。両者に対し同じ前提という術語を用いるのも理由がなく

3. この場合 I didn't know that Mary was honest と過去形にすれば何も問題は起らない。前提是「補文が真であることを話者が認めている」ということであって、「話者が認めていた」ということではないからである。cf: ?「Mary が正直であることを私は知らない」——「Mary が正直であることを私は知らなかった」I don't know whether Mary is honest or not は勿論差支えない。

4. Kiparsky-Kiparsky (1970, p.148 n.4) は、(16a)が I don't know but that Mary is not honest. と同じような意味をもつという趣旨のことをいっている。

もない。この問題はなお検討を要する問題である。

前提の解釈に関する意見の相異はいわば理論上の問題であるが、言語事実そのものも、今迄述べて来たように単純にすっきりと割り切れるものではない。動詞の種類、それを含む文脈によって色々複雑な問題がある。

たとえば report という動詞は、「～であると報告する」という意味と「～であること（～であるという事実）を報告する」という意味と2つあって、前者は非叙実、後者は叙実であるが、この違いは一つには、補文が「目的語+不定詞」の構造をとるか、動名詞構文をとるかにより示される。これは一般的にいって主として非叙実述語が「目的語+不定詞」の補文を許し、叙実述語のみが自由に動名詞補文を許すからである。次の(18)は(20)のような前提を有するが、(19)はそうでない。

- (18) They reported the enemy's having suffered a decisive defeat.

（敵が大敗北を蒙ったこと（事実）を報告した）

- (19) They reported the enemy to have suffered a decisive defeat.

（敵が大敗北を蒙ったと報告した）

- (20) The enemy had suffered a decisive defeat.

Report が that 節を従えた(21a, b)のような場合は、通例(23)のような前提はない（つまり(23)は真であるかもそうでないかも知れない）が、that 節が表層上の主語になった(22)のような場合には、通例(23)を前提とする。つまり表層上の主語の位置に補文が来ているかどうかが解釈に影響するわけである。しかしその場合でもUPIに対比の強勢をおいて...by the UPI(but not by the AP) といった意味でいえば、話は別になる。

- (21) a. The UPI reported that Smith had arrived.
b. It was reported by the UPI that Smith had arrived.

- (22) That Smith had arrived was reported by the UPI.

- (23) Smith had arrived.

また know, remember, pretend などは(15a)で叙実動詞の中に入っているが場合によってはそうでなくなる。たとえば(24)では and 以下の文が that 節を前提とするとはいえない。このことは、もし(24)の that 節の前に the fact を入れるとこの文は不適格になるということからも分る⁵。

- (24) No one came, and Mary didn't remember that anyone did.

更に remember, forget は、that 節、動名詞節を従

5. The fact を入れられるか否かについては後述。

える場合にのみ、補文の真を前提とするので、不定詞を従える場合はそうでない。

また hear, suspect などは、否定や疑問の時は、補文が真であることを前提とするが、肯定平叙文の時は、通例は補文の真を前提とはしない。（次の例文で S>S' は S が S' を前提とするという意、S*>S' は S が S' を前提としないという意）。

- (25) John didn't hear that Mary was hurt.>Mary was hurt.

- (26) Did John hear that Mary was hurt ?>Mary was hurt.

- (27) John heard that Mary was hurt.*>Mary was hurt.

しかし、(27)でも音調をかけて、heard に文強勢をおかげば、Mary was hurt を前提とするように解釈されると、(26)でも hurt に特別の強勢を加えれば、Mary was hurt は前提でなくなるといわれている。強勢のおき所により解釈が異なってくるということは、焦点に対立した意味での前提と、本稿で問題にしている前提とが無縁ではないということを推測させる。

また「知るようになる」という意味を有する learn, realize, find out, notice などは、通例は叙実動詞とされるが、if 節とか、可能性、蓋然性など法的意味をあらわす表現にはめ込まれた場合などには、叙実性を失ない、その点で regret などと異なる。

- (28) It is possible that I will discover later that I was wrong.*>I was wrong.

- (29) It is possible that I will regret later that I was wrong.>I was wrong.

また、もし叙実動詞が法助動詞（will, can など）とともに用いられると、補文は通例条件節でおきかえられる(30)が、時には that 節が用いられる(31)。後者の場合には、補文の真を前提とする。

- (30) It will bother me if he goes crazy.

- (31) Some day it may make sense that the city was destroyed last year>The city was destroyed last year.

要するに前提の問題は、ただ動詞が叙実動詞か否かで単純に決められるものではなく、ある一定の範囲の文脈で叙実性が発揮されるものであり、またひとしく叙実動詞といっても、どの範囲内の文脈で叙実性が発揮されるかには動詞の種類により差があり、これを扱うには白か黒かの両極でなく、その中間の灰色の領域をどう扱うかという考慮が必要かも知れない。

(p. 47 へつづく)



英語になった日本語（3）

—ウエブスター第3改訂版の日本語—

HASEGAWA KIYOSHI
長谷川 潔

ウエブスター第3版が1961年に出版されたとき、主として語法(usage)の点で、賛否とも大きな反響をよんだものである。かつては認められなかった用法が、数多くとりあげられていたからであろう。なかにはW2として知られる第2版の方がはるかにすぐれていると断定した学者もいたと聞く。アメリカ英語の現代用法を多く取り入れている点で、W3（第3版）の功績は大きいと思われるが、日本語・中国語を語源とする語いの定義に関しては、W2の方が信憑性があるように思える。

ウエブスターの第2版と第3版とをくらべてみると、第2版の方では、アメリカの国会図書館のArthur W. Hummel氏、東洋史の学者として知られるKenneth S. Latourette博士、故浅川エール大学教授などがアドバイザーとして名前をつらねているのに対して、第3版の方には、日本語・中国語関係の学者の名前はひとりも記載されていない。

去る3月末にマサチューセッツ州のスプリングフィールドにあるメリアム・ウェブスター社をおとずれたさい、この点についてたずねたところ、語源担当の編集員Gretchen Brunk博士から、W3に記載されている日本語を語源とする英語の定義については、ほとんどすべてW2を基準にしており、W2にのっていない新語については、Webster本社にfileされているcitationsをもとにしているという返答をえた。ファイルされているcitationsをいくつか見せてもらったが、大半が1945年までのもので、それ以後に書かれた文献からの用例があり集められていない。

辞書が出版される時には、その用例が古くなってしまうのは、辞書の一種の宿命のようなものであるには違ひないが、1950年頃からつづきと出版されている日本関係の英文の文献や、日本文学の英訳からの例文がcitation SとしてW3に使用されていないのは残念に思われる。

H の 項

Hの項では羽二重、萩、俳諧、俳句、はおり、はらき

り、平民などの語いがW3にのせられている。

H-1 habutai (tae)

A soft, lightweight Japanese silk in plain weave
(やわらかく軽い平織の日本の絹織物)

日本の絹織物として代表的な羽二重がWebsterにとりあげられている。すでに英語化した日本語ということで、和英辞書などでも、habutai, habutaeだけを訳語として与えているものもあるが、ほとんどのアメリカ人はこの単語を知っていない。イリノイ大学で日本語を勉強している学生約70人にたずねてみたが知っているものはひとりもいなかった。羽二重とは、簾一羽に経糸2本を通してしめし、緯糸を通すことからきたことばである。輸出羽二重は広巾で薄物が多いので、lightweightと定義されているのであろう。Websterのこの説明は、英米人に羽二重がどういうものであるかをしらせるよい定義といえよう。

H-2 hagi

a Japanese bush clover (*despedezabicolor*)
(日本のやぶクローバー)

この定義で正しいのかもしれないが、大半のアメリカ人学生は、cloverという語から日本のいわゆるクローバー（赤つめ草、白つめ草）と思ったらしい。

〔例1〕 This is a type of weed found in Japan.
It can not be eaten like some other types of weeds.

〔例2〕 A short green plant that can be used for fertilizing.

W3にbushとあるにもかかわらず、灌木ではなく、雑草と解釈してしまっている。Cloverという語のもつイメージが強すぎるからであろう。

H-3 haiku

an unrhymed Japanese poem of three lines containing 5, 7 and 5 syllables respectively, referring in some way to one of the seasons of the year, and constituting a late 19th century development of the hokku

（それぞれ5、7、5音節の韻をふまない日本の3行

詩で、なんらかの方法で4季のひとつに言及する。19世紀末に発句が発達したもの)

俳句はアメリカの小学校の上級生に教えられることもあるので、かなりスペースをさいて説明している。俳句は連歌から生まれた短詩で、季語をかならず必要としていることからもわかるように自然に対して非常に敏感な詩といえるだろう。上述の定義では、季語を, referring in some way to one of the seasons of the year と説明しているが、季節感よりもむしろ季節そのものを重視しているようにとられるおそれがある。要するに必ずしも季節そのものに言及しなければならないというのではなく、それぞれの季節を示す自然現象や行事などにふれて春夏秋冬の区別を表わすのである。多くのアメリカ人は、俳句を, the poem in praise of one of the seasons と考えているようだが、なかには、次のようなコメントを加えた学生もあった。

〔例1〕The haiku usually alludes to some natural phenomena but does not always refer to a season of the year. The haiku is a Japanese method of capturing life as it is. The visual image provoked by the haiku is similar to the attempt at naturalness made by sumi-e artists.

H-4 haikai

an often playful type of Japanese verse or prose cultivated in the later feudal age

(封建時代後期に発達した、しばしば諧謔的な詩または散文)

俳諧の中にproseがはいるのであろうか？多くの国語辞典では、①俗化した連歌、②俳句と定義している。『日本を知る事典』では、俳句と俳諧との関係を次のように説明している。

「俳諧とは、本来滑稽という意味で、もともと中国で用いられていたものである。滑稽味をおびた連歌のことを「俳諧之連歌」と呼ばれていたように、俳諧は連歌から生まれた短詩であり、発句（五七七）および百韻・五十韻・千句・歌仙・四十四などの連句を総称している。そして、のちには発句を俳句とよぶようになり、それのみが独立したものとなった。

松尾芭蕉に至るまでは滑稽・洒落が主であった俳諧は、彼によって、文学にまで芸術的価値が高められたといってよい。しかしその後、俳諧も衰退していき、十八世紀後半に与謝蕪村らがでて、再び隆盛になったが明治初期にはまたすたれた。」

俳句が俳諧からでたものであることはよくわかるが、いわゆるprose（散文）はふくまれていないようだ。

Webster の定義に対する学生の見解もこのことにふれて、莫然としてとらえどころがないとのべている。

〔例1〕This is really vague—perhaps some obscure kind of literary form. I can't see how it can be a single form if used in poetry and prose.

H-5 haori

a loose outer garment resembling a coat and extending to the knee and worn in Japan

（コートに似たゆったりとした上着で、ひざまであり、日本で着用される）

羽織はもともと実用の外着・防寒着であったので、昔は丈も長かったが、現在使われている婦人用の羽織は短かく、ひざまであるものはほとんどない。

H-6 harakiri

① suicide by disembowelment formerly practiced by the Japanese samurai or decreed to one of its members by the feudal court in consideration of his social status in lieu of the ordinary death penalty

② suicide by any means

（①かつて日本の侍が行なったり、あるいは侍のひとりに、通常の死刑のかわりに、その社会的地位を考慮に入れて、封建時代の藩延が命じた腹切りによる自殺。②いかなる手段による自殺）

「切腹」を英語で説明するとこうなるのかなという感じである。辞書の宿命として、スペースが限られているので、やむを得ないかもしれないが、切腹にともなう儀式的な面が説明されていない気がする。日本人が「切腹」ということばと共にすぐに連想するのは刀であるが、この定義には刀という言葉が使われていない。すくなくとも② suicide by any means というのはアメリカ人の解釈、または用法であって、日本語では「切腹」を自殺の代名詞として用いることはない。また、disembowelment というのも日本人がいだいている切腹のイメージよりもグロテスクな感じがする。

W3に定義されているようにharakiriを“suicide by any means”的意味に使うとすると、次のようなイリノイ大学生のコメントも英語としては可能になってくる。

〔例1〕The medieval Japanese man felt that the stomach area was the center of intelligence and by cutting out this area, the unclean or impure spirits and thoughts would be cut out.

Two very famous Japanese novelists have died recently—Mishima by seppuku and Kawabata through suicide or harakiri.

三島由紀夫の切腹はともかくとして、川端康成がガス

自殺をしたことを知っている日本人には *harakiri* は抵抗を感じる。

この *harakiri* を *suicide* の意味にとることについては、アメリカ人も意外に思ったらしく、次のようなコメントが集まった。

〔例2〕 The second definition must be its English usage.

〔例3〕 If *harakiri* is “suicide by any means,” is *baka* bomb also called *harakiri*?

H-7 heimin

the class of commoners consisting of peasants and laborers and traders in the Japanese social scale

(日本の社会階層において、農民、労働者、商人から成る一般の人々の階級)

封建時代の士農工商の身分秩序の中で農工商を平民といつたのであるから、最後に *during the feudal age* という説明をいれないと時代錯誤になる恐れがあるのでないか。

〔例1〕 This definition gives the impression that even today Japanese society consists of peasants, laborers and traders which make up the “lower class”.

〔例2〕 This seems to denote a rather rigid separation of classes in the Japanese society.

H-8 hibachi

a charcoal brazier

(炭火鉢)

アメリカ人が戸外で肉を焼くのに用いるバーベキューのスタンドのことでの日本の火鉢とはほど遠い。ふつう英語では *an open barbecue pit* といわれているが、広告などで *hibachi* for *barbeque* などと売り出されているところから、英語化したこのような使い方がでてきたのであろう。日本でも今や骨董品化した火鉢を英語で説明すると、次のようになる。

〔例1〕 The charcoal brazier called “*hibachi*” had been used to heat Japanese style rooms in winter; the word *hibachi* has recently been applied to a grill for outdoor cooking that is made of cast iron and is low to the ground.

H-9 hiragana

the cursive script that is one of two sets of symbols in which Japanese kana is written... compare *katakana*

(日本の仮名で書かれる2通りの記号のうちのひとつ、続行字の書体)

『日本を知る事典』によれば、ひらがなもかたかなも漢字を母体にして発達したものである。日本人はひらがなを表記文字として考えるが、英米人は「かな」を日本語の音符文字として理解する。

〔例1〕 The hiragana script is a listing of all the sounds used in the Japanese language and is comparable to the Western alphabet.

〔例2〕 This set of symbols is used for the pronunciation of words, where each symbol has a particular sound. It is the basic or first set learned by the students of Japanese.

ひらがな、かたかな、漢字による日本語の表記方法は、次のように英語で外国人に説明することができるだろう。

〔例3〕 The Japanese writing system consists of a mixture of hiragana, katakana and Chinese characters. Each hiragana symbol represents a Japanese syllable. Hiragana stands for Japanese words while katakana usually stands for foreign words.

H-10 hinoki

- ① sun tree
- ② the wood or fiber of the hinoki

(①檜 ②檜の木材または繊維)

日本はその国土面積の6割が山地であり、多種類の草木に恵まれている。W3にも「ひのき」をはじめ、「けやき」、「きり」、「はぎ」など日本の草木が記載されている。

和英辞書では「ひのき」は Japanese cypress と英訳されている。Webster の sun tree がなにを根拠しているのか定かではないが、「日の木」と書くのかとたずねた学生がいた。

H-11 hokku

① a fixed lyric form of Japanese origin having three unrhymed lines of five, seven and five syllables and being typically epigrammatic or suggestive

- ② a lyric in hokku form

(①短い韻をふまない5, 7, 5の3音節から成り、日本で起こった定型の叙事詩形式の詩で、風刺的で示唆に富んでいる。②発句形式の叙事詩)

俳句、俳諧、発句とすべてがW3にのせられていることからも類推できるように、アメリカ人の俳句に対する関心はかなり強い。俳句の項でもふれたが、俳諧から初めの部分の発句が重視され、それが俳句として確立したことが、定義に加えられるべきであろう。

一般にアメリカ人は haiku という語はよく知ってい

ても、haikai, hokku は知らないようである。

〔例1〕 More commonly known in the U.S. as haiku. Important point here is that definition defines to "Japanese origin", because this form has uniquely been adopted into use by English poets.

I, J の 項

I, J の項では iroha, issei, judo, jujitsu, judoka などの語がW 3 にとりあげられている。

I-1 iroha

the Japanese kana in its popular order in distinction from the scientific arrangement which is based on that of Sanskrit

(サンスクリット語の配列に基づく科学的な配列とは異なり、人々に親しまれている順序になっている日本の仮名)

すでに述べたように日本の仮名は漢字を起源とするのであって、サンスクリットにもとづいているのではない。またひらがなの項があるのだから、ただたんに kana とするよりも hiragana とすべきであろう。

さらに欲を言うならば、「いろは」は「いろは歌」であることもつけ加えてほしかった。

〔例1〕 This definition implies that Japanese kana is based on Sanskrit and not on Chinese and that this is a popular order not a poem.

〔例2〕 This should indicate that it is based on the popular poem, utilizing each and every one of the phonetic hiragana.

I-2 issei

a Japanese immigrant to America and esp. to the U.S.

(アメリカ大陸、特に米国への日本人移民)

南米、カナダにも移住した日本人が多いので、to America したのである。日系のアメリカ人は移民—immigrant ということばに抵抗を感じるらしく、a first generation Japanese who live in America and esp. in the U.S. とする方がよいという意見が多かった。米国の1世、2世、3世の区別は次のように説明できる。

〔例1〕 Issei are the first generation Japanese who came to live in the United States in any significant number. Their children of the 2nd generation are nisei, and the 3rd generation are sansei.

J-1 judo

a modern refined form of jujitsu utilizing special

applications of principles of movement, balance, and leverage

(柔術を近代的に洗練したもので、動き、平衡、てこの原理を応用している)

Judo は今やアメリカでもっともよく知られている英語化した日本語になっている。柔術のほうがあまりよく知られていないので、この項で、a form of self-defense であることをのべるべきであろう。また相手の力を利用してたおすということにもふれてもらいたい。

〔例1〕 Today, judo is stressed as a form of self-defense. It is very much an art and utilize the opponent's power to your own advantage.

J-2 jujitsu

The Japanese art of self-defense without weapons that depends for its efficiency largely upon the principle of making use of an opponent's strength and weight to disable or injure him... see judo

(武器を用いない日本の自己防衛術。敵をたおすため主として相手の力や体重を利用する原理に基づいて効果をあげる)

「やわら」ということばは、今でも日本人の間で使われているが、柔術ということばはいまではほとんど耳にしない。jujitsuの項をもうけるよりも、柔道の項で武器を用いない日本の格闘術であることを定義するほうがよいと思う。

J-3 judoka

one who participates in judo

(柔道をする人)

これはやはり a judo master か a judo expert とすべきであろう。この語は柔道を特にやっている人以外には英語としてはほとんど使われていないようだ。したがって、日本語化した英語といつても、ほとんど日本語と同意義で用いられているといってよいだろう。「柔道家の『家』」は、言うまでもなく、柔道をもって一家をなしいている人の意味だから、ただ単に one who participates in judo ではなく、a judo master (expert) が妥当のように思える。

(次号に続く)

(アリゾナ大学フルブライト客員教授)



外国语としての日本語教育

—英語教育者のために—

KUKI

HIROSHI

九 鬼

博

ELEC で外国人のための日本語教育を行なうことを考慮中と伺い、ご同慶に耐えない。本小論では、英語教育関係の諸賢の方々の間で、驚く程知られていない第2外国语としての日本語教育 (TESL ではなく JASL) の「海外」での歴史と現状、教材とその言語学的背景を概説する。「海外」には日本を含めるが東南アジアは除外する。日本を含めたアジア地域での歴史と現状については発足後10年程になる、日本語教育学会の機関誌『日本語教育』を第1号から精読されたい。

1. アメリカ型とヨーロッパ型

地域的には二大分が出来ると思う。第1は「アメリカ型」で、第2は「ヨーロッパ型」である。アメリカ型の場合、日本語の会話がまず1~2年みっちり教えられ、その後読み・書きに入る。アメリカ型は後に詳説するが、ヨーロッパ型はこの逆である。この二大別は地域的分類でなく、むしろ言語(学)中心と文学中心の違いである。

アメリカ型の場合、戦中、戦後の日本との出会い、個人的接触の結果、旧来のヨーロッパ型の文学中心の文献研究的日本語学習から、言語(学)中心へと移行せざるを得なかった。戦前、戦中初期には教材もヴァカリイー・長沼(読本)、およびライシャワー氏のハーバードのリーダー等に頼っていたらしい。北米での訳讀文法から会話中心への移行は、戦後の全米での言語学の隆盛と無縁ではない。構造言語学者達は言語の第一義的形態はその話し言葉にある」と外国语教師に説いた。この派の応用言語学者達の外国语教授法は日本では「ミシガン・メソッド」なる珍名で知られるようになった。

ヨーロッパ型の文学中心は『源氏物語』を訳した、英國のアーサー・ウェイリーに代表されるが年代的にはマルコ・ポーロの昔に遡る。日本が文字通り「極東」にあるから、また行けそうに無いから興味がある。せめて日本文学でも読もうという心理である。恋する文明民族、日本人が床の上にじかに寝ている筈が無い。「彼等はベ

ッドに寝起きする」筈である。『源氏』を読んで下さってありがとうございます。涙が出る。モスクワを中心としたソ連の日本語教育もどちらかというと、ヨーロッパ型に始まった。

日本の大学での英文科等言語・文学系の学部に言語(学)派と文学派が有り、日本では大抵文学派が圧勝する。シェークスピアは草葉の陰で嬉し泣きに泣いていることであろう。ヨーロッパ型では、会話は、やはり準選択科目である。アメリカでも古くから日本語を教えている大学等はヨーロッパ型に属する。

日本語教育 (JASL) では日本における「外国语としての英語教育 (TESL)」以上に、話し言葉と書き言葉の比重の置き方が難しい。カリキュラムを新規に作成する場合、学生の言うことをアンケートにとると面白い。東京に本人が居ても『源氏』を原文で読破したいという青年から、婚約者が日本人なので…という若い女性迄、日本語学習希望者はその動機が十人十色である。

アメリカ型はソ連型も含め、ここ5年程の間に明白な偏向をした。10年前から有ったがそれは「日本語の為の日本語」から、「研究道具としての日本語」学習への移行である。他の言葉でいえば大学院レベルでのヨーロッパ型への移行である。分りやすい例がアメリカ人の大学院の学生の「中国研究」であろう。数は増えふえる傾向にある。

日本人が明治以前に書いた物で、今だにその長い伝統を誇るものとして、我々の中国研究が有る。修士論文、博士論文に中国研究を選んだ学生はアメリカで日本語を習ってから、台湾か日本に来る。まだ中国本土へ行けないからである。ロシア史専攻のアメリカ人、日本人の学生がドイツへ行くのと同じである。日本人の中国研究の大家の書籍を英訳すれば、八分通り、アメリカ人の博士論文となる。そんな「古き良き時代」が去りなんとしている。

アーサー・ウェイリーが日本語を一言もしゃべれなかったという神話伝説は余りにも有名である。アメリカの



逆に行く、ヨーロッパの日本「文献学派」の伝統がそう長く続くものとも思われない。ひとつには戦後の日本が経済・科学技術の面で欧米人が習ったがるだけの充実した内容を持ち始めたことも一因であろう。英、米、独、仏、露以上の独自な研究成果、実績は最早、十数世紀の伝統を持つ日本の中国研究以外の分野でも見られ、その文献は多くは国内用に日本語で発表される。少し元気の良い若者なら現場検証を行ないもしたくなるのである。

この派の日本（語）研究グループを「豪州型」と呼ぶのが最適かもしれない。3、4年前豪州の西オーストラリア大学（州立）で、日本語科を作った時に経済学部の中に併設された。現金な話である。目標は学生が日本の経済紙（または「誌」）を一日も早く（速く）「原紙講読」できるように…ということであった、と記憶する。別名「産業スパイ育成型」日本語教育と言っても当らずとも違からずであろう。キャンベラの豪州国立大はアメリカ型の亞流である。豪州の場合一首都圏、七州の各教育局の決定により異なるが、前述の豪州型の基本政策は中学、高校に迄および、旧来ヨーロッパ特に英國型に沿い、ラテン・ギリシア・独・仏を教えていた教師に日本語を習い、教えるよう通達が行っている。極端な場合には日本語を覚えるか失業である。日本に呼んであげられたら…とよく思ったものである。

日本研究も帝政ロシア時代から歴史も古く、偏傾も少なく、そのカリキュラムも文献中心と言語（学）中心の双方を、上手に、かなり以前からバランスを配って教えているのは、モスクワを中心としたソ連の日本語教育であろう。アメリカ型とヨーロッパ型の双方を同時に併行して教えている。

東南アジアは大日本帝国時代の植民地日本語教育に墮する。ドイツのゲーテ・インスティトゥト、フランスのアリアンス・フランセーズの日本版と解して頂いて良いと思う。

2. 諸教材とその理論言語学的背景

アメリカ型の詳説に入ろう。1950年代の実情を中心に前田陽一先生が自著『アメリカ大学巡り』（昭和36年、大修館発行、絶版）で、いわゆるアーミー・メソッド（「軍隊方式」）がいかに戦後、アメリカ中の諸大学に滲透するに至ったかを、上手に手短かに説明されているので、同著より一部まず引用し、その後詳細に入り、ついでに後日談をする。

「…第二次大戦に直面した米国陸海軍は、日本語をはじめとする特殊語を自由にあやつれる米人が驚く

程少ない事に初めて気がつき、あわてて強度の語学訓練を開始した。その訓練計画を依嘱された言語学者の一群は、アメリカ・インディアンの言語分析から特に発達した構造言語学の成果をさっそく教授法に応用し、めざましい成功を遂げた。そして從来のように、主として目にたより、文法規則の丸暗記から始めるやり方ではなく、自國語と学習すべき外国語とのそれぞれの構造分析を前提とする合理的教授方法を確立した。すなわちそれぞれの構造分析の結果明らかにされた彼我両国語の音声上および構文上の相違を整理し、その違いや必要度の大小に応じて、最も違いが大きくしかも必要度の高いものから順次覚えさせて行くのである。しかもその際には、主として耳と口との訓練にたより、何度も何度も繰り返し練習させて、外国語の異なった語法が自動的に口をついて出るようになるまで続けるのである。教材さえ専門の言語学者が作れば、平生の練習は、本国人なら別に語学教授の経験のないものでもだれでも良いから引っぱってきて、その教材通りに次々に少人数の学級で練習を繰り返すのである。

これは要するに、從来は、外國へ行って何年も暮して行くうちにだんだんに慣れて覚えて行く過程を合理的に短縮したものである。すなわちただ行き当たりばったりに、何度も何度も同じような事を聞いて行くうちにだんだん覚えていったものを、構造分析の結果、最も覚え難いもの、または応用度の高いものから順々に、要所要所集中して組織的に覚えさせ、何か耳にすれば、それに対する答えがもはや自國語を仲介とせず、直接に反射的に口をついて出るよう訓練を行なうのである。

このやり方で…秀才を選んで徹底的に厳格な訓練を施したのでキーン…級のすばらしい日本語使いを多数養成したのである。

この方法は…大学にまで取り入れらるに至っている。…」（前述前田陽一著『アメリカ大学巡り』大修館、昭和36年発行、125—126頁）

この時代の産物が Bloch-Jorden (1945) である。著者が日本語を本人達自身覚えながら教材を書き、ついでに教えたという。出版は終戦の年で各課の新教材の提出方法としての短かい対話 (dialogues) という方法の考案に迄は至っていないが、後に日本でも珍重されるようになったミシガンのフリーズ・ラドーの手によるスペイン語を母国語とする学生を対象とした一連の英語 (TESL) 教材程度のものが、我々の母国語である日本語を外国語として教える (JASL) ために終戦の年に既に公表するだ

けの内容の物が出来ていた事を知る人は意外と少ないようである。

アメリカ構造言語学の理論的メックはやはり、イエール大学 (Yale) だったと思う。ブルームフィールドの後継者バーナード・ブロック (Bernard Bloch) がイエールで出版した日本語の英文による構造言語学的日本語の分析4点 (音素論1, 語形論2, 文法1) はアメリカでは余りに有名である。(Bloch (1946a, 1946b, 1946c, 1950) 参照。この4点は Miller (1970) に再録されている。) ブロックの下で博士論文を書いたサミュエル・E・マーティン、エリナー・H・ジョーダン等も日本語をテーマとして選んでいる。このような事情から、前田陽一氏の「軍隊方式」(「アーミー・メソッド」)を、筆者は「イエール・メソッド」と呼びたい。TESLの「ミシガン・メソッド」の日本語 (JASL) 版である。

ブロックが弟子ジョーダンと共に1945年に当時の連邦政府の戦事局 (War Department) から出した2巻本 (2 parts) の *Spoken Japanese* は、今日では殆んど入手困難となっている。戦後はこれが全米の各大学で1961年頃迄広く使われていた。1962年から1963年にかけてジョーダンが1945年発行の日本語教材の改訂増補版 *Beginning Japanese* (2巻本、イエール大学発行), Jorden (1962-63) を出版し、これが1960年代の前半を支配する。Jorden (1962-63) は出版後10年以上経過した今日でも数々の長所を持っている。

各課の教材は短かい対話 (dialogues) の型で導入される。教語と日常語が並行して教えられる。各課の dialogues に日常会話の主なトピック (話題) がついている。ピッチが日本文に (ローマ字) 全てついている、等々であろう。アメリカの大学では英語を除き、何語を履習しても、月曜から金曜迄、毎日一時間のクラスと20-50分程度のラボが必らず普通ある。月曜日にはその週にカバーする教材、文法内容、ドリル等の目的、難点、習得法等がアメリカ人、または英語を話す日本人の言語学者によって説明される。火曜から金曜迄は日本語だけでダイアローグ、ドリル等を履習する。これには日本から来たばかりの、大学卒の日本人大学生が普通あたる。稀れには一生「万年軍曹」に甘んじておられる奇特の士も居られる。このパターンの JASL 教授法を linguist-informant method とも言う。自己の言語分析に客観性を失なうのを恐れてか、ブロックは日本人 informant と日本語で一言も交わさなかったとも伝えられている。

アメリカでは中学・高校で余り外国語を教えない。そこで学部の低学年でスペイン語、フランス語、ドイツ語、ロシア語等が履習されているが、皆、同種の教材を

用い、linguist-informant method に従っている。教材では日本語、スペイン語等の物が常に優れ、外国语としての英語 (TESL) 教材が一番拙劣である。「燈台下暗し」と言えばそれ迄だが日本でも国文、英文、その他の外国语教師、言語学者の順で優秀な人材が流れがちなのはアメリカでも同じである。

1964年-66年にかけて、ハワイ大学の東西文化センター発行の *Young-Nakajima* (1966-67) が出版される。この4巻本 *Speak Japanese* では、日本語口語を Jorden (1962-63) のように教える他、日本字を徐々に並行して教えている、Jorden (1962-63), *Young-Nakajima* (1966-67) 共に大冊で千頁を優に超える。*Young-Nakajima* には、dialogues の内容に沿って描かれた、overhead projector 用の slide sheets がテープ等と共に市販されている。イエール教材では、書き言葉としての日本語は Miller (1962) 等、別の教材で教えられる。

1965年前後を境にして、北米の各大学は各自の外国语としての日本語 (JASL) 教材を出版し始める。これらの教材の大部分に共通して言えることはブルームフィールド以降の構造言語学の大公理のひとつ、「言語の唯一にして、眞の形態はその話し言葉である」という不文律であろう。ローマ字の日本語が、普通日本字 (Japanese orthography) の前に、または並行して教えられている。最新版としてはサイデソスティッカー監修、ナガラ・ススム氏編のミシガン版があるが、英語教材と同じく、外国语としての日本語教材も英語国民向けに書かれたものは、そろそろ百家雷鳴の感を提して來たので、現物を見て頂くより方法が無い。

英語国民に日本語の構造について質問を受けた場合、前述 Jorden (1962-63) の他、Martin (1954), Alfonso (1966) 等が参考文法書 (reference grammars) として役に立つ。巻末に詳しい索引が有り、本文も素人にも分りやすく、客観的にみた日本語の構造が、英文で説明されているからである。

どの分野でも理論が出来てからその実践までは平均20-30年はかかるものらしい。Bloch (1940 a, b, c; 1950) と Jorden (1962-63) の間にさえ 10 年以上の年月が過ぎている。Bloomfield (1933) 迄、逆算すると 1 世代の年月となる。ちなみに日本語の変形文法的研究・博士論文等は既に山程あるが、その研究成果を充分に盛り込んだ英文の日本語教材は未だ出来ていない。

3. 日本語教師の資格

ブロック、マーティン等イエールの言語学者達は日本の国文法学者を native grammarians と称しているがこ

これは人種的偏見ではない。かな書きの日本語では正しい分析は出来ないのである。これは Elson-Picket (1965) Nida (1949) あたりで構造言語学的語形論 (morphology) を、自習して頂けるとすぐわかる。ローマ字でもヘボン式では正しい分析は出来ない。服部四郎 (1951) にもある様に訓令式でも充分に科学的とは言い難い。撥音は \bar{n} 。または N, 促音は Q と表わすと良い。suru, kuru の例外を除き、国文法で言う「上一段動詞」と「下一段動詞」は「母音動詞」とひとつのグループを成し、「子音動詞」とのみ対立する。「母音動詞」と「子音動詞」の区別も、動詞の語尾を形態音素 (morphophonemes) で表記すれば必要となる。

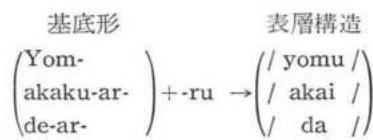
日本語動詞語尾基本形	異形態
{-Anai}	-anai/-nai
{-I}	-i/-φ
{-Ru}	-u/-ru
{-Reba}	-eba\-/reba
{-yoo}	-oo/-yoo

左側の基本形から表層形を導くのには、次の 2 つのルールだけで足りる。これらは日本語の phonotactics (音素配列論) と全く一致する。

R, Y → φ / 子音動詞語幹——(例 kak-)

A, I → φ / 母音動詞語幹——(例 tabe-)

勇康雄 (1964—66) 等で明らかにされたように、日本語の変形文法的分析では動詞、形容詞、形容動詞も実はひとつの語尾変化群を持つ品詞である事が今日ではわかっている。



(勇康雄 (1964—66; 13.9—14.12))

Fries (1945) にたしか、こんな一節が無かったであろうか。

"...The native speaker of a language, unless he has been specially trained to analyze his own language processes, is most likely to mislead a foreigner than to help him when he tries to make comments on his own language...."

Informant 型の日本語の先生には誰でもなれる。教材が良く出来ていて、教材通り、教材の指示に従って教えられるからである。linguist 型の日本語の先生には少なくとも構造言語学の素養が必要である。

日本語の助詞はヘボンの昔には postpositions (「後置

詞」) と言った。その後 particles (「小辞」) に変わり、ハワイでは relational (「関係詞」) と言っていた。助詞の「は」は topicalization または thematization という「変形」の概念を平易に説明すること無しに、学生に分らせる事は少なくとも本稿筆者には出来ない。主格助詞には「が」が有るのみである。

文(1) Watasi ga/anata to/asita/koko de/hirugohan o/tabemasyoo.

主題化の助詞は句の終わりのどこにでもつけられる。

文(2) Watasi ga-wa/anata to-wa/asita wa/koko de-wa/hirugohan o-wa/tabemasyoo.

但し ga-wa と o-wa の連結 (sequences) は wa だけに delete (削除) される。

文(3) ① {ga-wa} → wa ② φ-wa → wa

主題化の現象はかなり普遍なもの (language universal) であり、印欧語では It...that... 構文等、その他会話では主題化された語句の強勢発声、イントネーション等で表わされる。文語ではアンダーライン、またはイタリック体でしばしば表記される。ポリネシア諸語では構文的变形と主題化助詞を併用して、主題化变形を行なう。

現行の日本文表記 (current Japanese orthography) は確かに難しい。日本語自体は世にも稀な位、美しい体系を成しており、欧米人にもこれ位覚え易い言語は無い。(在日) 外国人に対して「日本語は難しい (ですよ)」と「馬鹿のひとつ覚え」のように宣伝されても困るし、教養の程が知れる。

日本語の書記体系にしても、これ程合理的で経済的なものは無い。漢字の表意性を取り、語尾変化や外来語は各々ひらがなとかたかなで音節表記をする。英語も多分日本語式に書いた方が良かろう、と 1966 年に東京でなされたチョムスキー発言は彼の深い言語理解を示す。外国语としての日本語学習という楽しい趣味をお勧めする。

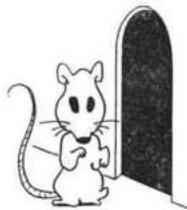
4. 結 語

日本語習得を日本で希望する外国人に、本国で日本語を既にかなり習って来る者と「ポット出」が有る。前者の場合、レベル、内容共々十人十色で、クラス編成が難しい。母国語の違う学生をひとクラスに入れてしまうのも考えものである。概して他の諸国語同様、日本語もゼロからの方が教え易い。教材は日本語学習希望者数に比べ、既に有り過ぎる感じである。

本稿執筆に際し、絶版となつた良書の著者稿を心よくお貸し下さった前田陽一先生に心から謝意を表し、筆をひとまず置かして頂く。(世田谷留学研究所コンサルタント)

No Side!

—All's well that ends well—



1

道を歩いていると、どの家も高校野球を見ているらしい、活気にみちたテレビの声が流れてくるので、途切れることなく試合の様子を知ることができる。あの真剣そのものの高校生のプレーぶりがたまらない、郷里の学校に勝たせてやりたい。理由はいろいろだが、日頃あまり野球などに関心のないような人までが、甲子園の高校野球の間はテレビのとりこになるからおもしろい。ことしもその季節である。

真剣な試合ぶりはいいが、一般にすこし度が過ぎはないか、試合が終ると、勝っても泣き、負けても涙、である。負けたチームの選手が甲子園の土を袋へ入れて持ち帰るのをテレビのカメラが写し出す。見ているものをつけめぐらとさせるシーンだが、スポーツはこれでなくてはいけない、などと考える人が出てくるようだと問題だと思う。

ここまでに何回も「試合」ということばを使ってきたが、これがそもそも大げさである。ゲーム、とかマッチに比べて、いかにも真剣勝負だという感じがする。昔の果し合いの血なまぐさをどこかただよわせている。もちろん、これは野球に限ったことではなく、まして、高校野球だけのことでもないが、スポーツはもうすこし大らかに、明るく、勝ち負けにこだわらないようにできないものであろうか。

オリンピックにしても、勝つことではなく参加することに意義があるので、と言われるけれども、本当にそう思っている人はすぐない。勝ってくるぞと勇ましく出かけるから、何としても勝なくてはならぬと思い込む。そ

の心理的負担でかえって実力も発揮できずに不成績に終って帰る例がいかに多かったことか。

もっとリラックスしろ、と言っても、まわりが勝て勝てと騒ぐのでは無理というものである。「試合」がいけないだけではない。第1回戦、第2回戦、決勝戦など、すべて、「戦」である。平和国家にふさわしくない、と野暮を言おうとしているのではない。比喩がすこし殺伐すぎ、それに競技者が影響されていはしないか、ということである。ダッグアウトの屋根の上で、猛暑の炎天に黒の詰襟を着た応援団が死もの狂いで叫んでいるのを見たりすると、「戦」が比喩ではなくて、現実味を帯びてくる。

英語の the first game, the second game, the final game [the finals] と比べるといっそうその感を深くする。もっとも、英語でも finish fight という表現もあるが、概してのんびりした形をとっている。われわれの方が勝負にこだわるとすれば、その一因は、まじりを決して敵と相まみえるといったスポーツ用語にあると言えそうだ。

試合は試合である。負けたくて勝負をするバカのあるはずがない。しかし、勝負は時の運でもある。試合が終れば、お互いの敗闘を讃え合う。それがスポーツマンシップである。血みどろになって死闘をつづけたボクシングでも、最終 round のゴングが鳴ると、両者歩み寄って笑顔で相手を讃える。いつ見ても心なごむ光景である。あとに敵意を残さぬことを公表しているわけで、こういう儀式はなかなか意味深長である。

2

試合が済んでしまえばもう敵でも何でもない。そのことを端的にあらわしているのが、ラグビーの試合終了を告げる No Side! である。試合中に、敵、味方に分れて、つまり両方の sides で戦っている。しかし、試合終了ともなれば、すでに side はないという。なかなか、味な表現である。われわれもその精神を、ひとりラグビーだけでなく、スポーツ全般について、さらには広く競争一般において学んでいきたいものだ。

ところで、ラグビーはフットボールから派生してきたスポーツであるのはご存知のとおりである。この由来が、イギリスのパブリック・スクールの雄ラグビー学校にあるのも知る人は知るところだ（ラグビー学校と言ってもどこかの国のように野球ばかりしているから野球学校だと陰口をきかれるのとはちがって、ラグビーばかりしているわけではない。愈のため、それどころか、19世紀のはじめ、名校长 Thomas Arnold 『大批評家 Mat-

thew Arnold の父) によって改革されて、全英パブリック・スクールの模範とされた名門校、エリート校である。)

ラグビー学校で始まったスポーツだから、学校名に敬意を表して Rugby football と言うのである。この Rugby (football) がナマってできたのが Ruggger というわけだ。

Rugby School の 'Doctor's Wall' にラグビー発祥の由来を記した縁起が掛っている。その文句は、

「William Webb Ellis 君の偉業を讃える。君はフットボールのルールを頭から無視し、両手にボールをかかえて疾走した。かくてラグビー・フットボール (Rugby Game) の特色を創始した。ときに西暦1823年なり…」

フットボールでボールに手がすこしでも触れれば「ハンド」(hand touch) になる。相手側に「フリー・キック」(free kick) の与えられる反則である。少年 Ellis 君は、白熱した試合にわれを忘れたのか、「ハンド」などという生やさしいものではなく、ボールをかかえて突っ走った、というのだからものすごい。

そういうひどい反則なのに、これをとりあげて新しい形式のフットボールをつくるというのは、いかにもイギリス人らしい現実主義である。Rugby (Game) という語が英語に確立するのは、O. E. D. によると、1864年で、Ellis 少年の故事から40年近い歳月が流れている。

ラグビーの試合終了を告げる言葉が No side ! であるのは、このスポーツが、その発祥のそもそもからして、いかにはげしいぶつかり合いをするものであるか、したがって、試合が終ったら妙な対立感情の残らぬようという配慮もそれだけ必要であったことを物語っているように思われる。ラグビーにかぎらず、およそはげしい戦いにおいてはいつどこでも、終れば No side ! を宣して互いの健闘をたたえ合うようにしたいものである。勝負を根にもったりするのは外道である。

No side ! を叫ぶのにはまた、そういうフェア・プレーの精神を重んじるイギリス紳士の気風を反映していると考えられる。今までこそいくらか色あせた English Gentleman だが、かつては世界をまたにかけて雄飛した紳士道である。彼等の心の古里がイギリス独特の全寮制中学校 public school なのである。その名門でラグビーが生まれたのは偶然ではあるまい。

3

そうは言うものの、やはりスポーツに勝負はつきものである。負けた方がいいなどというスポーツはないのも事実である。All's well that ends well. 最後に笑うも

のが真に笑う、のである。そして勝負は水もの、最後の最後までわからない。

ところが、試合を観戦している側からすると、試合が終ってしまえば、すぐ席を立つ。ときには、勝負あったと見れば、8回の裏あたりから野球の見物が帰り出すこともある。それで試合の終りに審判が何と言っているのか、はっきりした印象がない。

何も言わなくても、ゲームが終了しているのは見ればわかる。その点でおもしろいのはバレーボール (volley-ball) である。試合が終ると、台上の審判は笛を吹いて、同時に両手の手の平を下に向け、手首のあたりでこれを交差させるゼスチャーをする。言葉はなしである。これなら万国共通にわかりがいい。

このところ人気の高まっているテニスでは、審判が Game set and match won by (so and so) となかなか優雅な勝名乗りを審判が勝者に代って代弁していく、いかにものびやかである。古風で貴族的な感じがする。こういう判定が聞きとれるというのもテニス・コートが比較的小さくて、観衆の数もかぎられているからであろう。野球場などで、同じようなことを叫んでもほとんど聞きとれないに違いない。

大観衆を前にして行なわれるスポーツではゼスチャーが大きな意味をもつ。そして、ホイスルが重要になる。サッカーの試合終了は Time up ! というようだが、それよりも、レフリーがつよくホイスルを吹いて、両手を万歳みたいにあげるゼスチャーの方がわかりがいい。スポーツが大型化して行くと、言葉よりゼスチャーという傾向がつよまって行くであろう。

野球の開始は、プレー・ボールが正しい、いや、ただプレーだけが正しいのだ、と説が分れているが、試合終了のコールは、わが国ではゲーム・セット (Game set!) が多く用いられている。これはテニスのコールに似ている。ところが、アメリカで、ゲーム・セットは用いられないで、ゲーム・オーバー (Game over !) と言う。しかし、どうも、われわれにはゲーム・オーバーではピントこないのだろう。わかっていても広まらない。

スポーツといえば、すべてこれ、舶来スポーツ。どうもしっくりしない。つい勝手な和製英語をこしらえていくらか落着くということになるのであろうか。思えば哀れな話である。ひとり氣を吐いているのが柔道で、国際試合でも日本語の「ワザアリ」や「イッポン」が通用するのだから強気 (ごうぎ) なものだ。試合の終りは「ソレマデ」と言うのであろうか。その「ソレマデ」が出たところで、今回は「コレマデ」ということにしたい。

(P.P.P.)

『なんで英語やるの?』

—ある英語塾の記録—

中津僚子著、午夢館、B6判、420pp.、¥890

YAMAMOTO SHOZABURO

山本 庄三郎

本書は学校教育という枠組の外で子供たちに英語を教えるため、体当りで奮闘した7年間の実践から生まれた現行英語教育に対する痛烈な批判の書である。批判の書というよりは告発の書とした方が正しいかも知れない。

著者は商業美術を勉強するために渡米し、そこで結婚し、子供を持ち、9年間の滞米生活の後1965年に帰国した。英語教育に関してはいわゆる専門的 background を持たないにもかかわらず、現在の日本の英語教育、もっと広くは教育全体に大きなインパクトを与える書を世に出し得たのは「ことば」と「人間」に対して彼女が持つ並はずれた鋭い洞察力によるものである。そしてまた現在の学校教育の中にある諸々の偏見に染まらない者だけが持つ澄んだ眼なくしては成し得なかった仕事であるようと思われる。

動機、出発、疑問、深まる疑問、要望、と全体を5章にまとめ英語教育にかかわりを持つに至った動機の紹介から始まる。第一章の中ばあたりまでに著者の余りにも強烈な個性に圧倒される読者もあろうが第一章を読み終わると2児の母親としての彼女のイメージが読者に一種の安堵感を与え、同時に次章から展開される著者の実践への好奇心と期待感のようなものが不思議に読者をとりこにしてしまうのである。

彼女の指導は従来の「勉強」に結びつけられている子供たちの行動規範のようなものから、子供たちを開放することから始まる。子供たちの感情の開放である。人間らしい感情を取り戻すことが彼女の教育の土台になる。著者は教科の点数を子供の人格と置き換えるような教育的偏見の風の外にあった。何よりも子供一人ひとりを人間と見た。この書が人間性無視の英語教育告発の書たり得たのも、英語教育を人間教育の一環としてとらえ、そこから出発したからに他ならない。人間教育であったからこそ彼女の英語教育は公害問題と無関係であり得なかっただし、また日本の対外政治姿勢も著者の関心の外にはあり得なかつたのである。

教条主義的教育方法論と無縁な著者の教育には、從来

の英語教育では考えもつかない学習活動が飛び込んで来る。然し良く注意してみれば、絵をかいたり跳びはねたりする活動の中に子供たちにのびのびと自己主張させるねらいがあり、またそのような活動を通して、発表する思想の整理をも目ざしている。単なる Yes, No の发声練習の中にさえ、單一民族、單一文化の島国のぬくもりの中でえてて忘れがちの民族的自覚をさえ願い、それを以って世界に自己主張できる子供たちの成長を目指すのである。

著者のこのような教育哲学は永い間の異民族の間での生活から初めて生まれたものだけではない。戦後のあの苦渋の中で、英語国民である占領軍にややもすると阿ゆ迎合的な構えから英語に取り組む一般的の風潮とは逆に、著者は彼等と対等の立場に自己を置くため、著者の言葉を借りるなら「(彼らとの) けんかに勝ちたいために」英語を始めたという所にその萌芽を見る事ができる。

日本の英語学習者と著者の最初の出会いは AFS で渡米する女子高校生であった。彼女の準備した英語スピーチは著者には全然理解不能であった。おそらく over-learn した彼女のスピーチの音声は言葉の意味から離れ形骸化した音声が日本語の音とも英語の音ともつかない一種独特の音の連鎖を形成していたのであろう。このような現象は、著者の考える方言の音声作用によるというより、文の機械的な暗誦とスピードに重点を置く指導から生まれる生徒の共通した特性である。著者は alphabet から英語の基本的音声指導を始めるのであるが、単なる音声の調音的指導にとどまらず、英語国民と日本人の发声法の根本的相異点に着眼し、著者のいう腹式呼吸による发声指導までも音声指導に含めている点は注目に値する。「腹式呼吸」の定義の問題は別として、確かに母者連鎖の著しく多い日本語の場合、不可避的に喉を使う发声法が極めて発達する。浪花節的发声にあるような音声的美意識の生ずる特殊性もこの辺にあるのだろう。このような发声法は、音声器管前部の者、特にその破裂音を弱める。著者は子供たちに全身的な運動をさせ、咽喉周

辺の筋肉の弛緩の後に思い切り破裂音の練習をさせる。th, f, v の者までも破裂音としている事に異議を唱える読者があるにしても、著者の着眼点の正しさはゆるぐものではない。

著者の教育の中では何よりも子供たちの豊かな感情を大切にする。それなくして人間の言葉として英語を見、英語国民を我々と同じ人間として見、彼等の感情を理解することが不可能であると考える。そして英語学習の際に要求される最も重要な能力として、英語の背後にある社会・文化・風俗習慣の理解能力を置き、次に言語能力、最後の要素として表面にある発音その他を置いている。これは表面的な言葉の意味を「訳」する学校英語的「訳」と次元を異にする、「人間の意志を伝える」という通訳本来の役割を少なくとも経験しその仕事の厳しさを知り尽くした者から初めて生まれる教育理論のように思える。

第4章「深まる疑問」の中では、現行中学英語教科書に対する痛烈な批判が挙げられている。特に感情無視の画一的イントネーション指導と、入門期教科書内容のナソセンス度に対する批判は痛快さえ感じさせる。彼女のイントネーション指導の批判に関連して、日本に1966年から1971年まで滞在し、大学生に演劇指導を通じて英語指導を行なった演劇ディレクター、Richard Via 氏の指導を思い出すのである。氏は絶対にセリフの音声的モデルを与えたかった。学生がその発話と場面の意味を理解すれば必然的に正しいイントネーションが生まれるという氏の持論に従って、イントネーションが間違っている場合にはその発話とその前後関係を理解されることに集中した。また氏は破裂音に特に重点を置いて発音訓練に発声練習を含めた指導を行なった外国人として、評者の見た最初で最後の教師であった。

著者の塾「発見学校」では、教師が英語の知識の断片の切り売りはしない。常に子供たちの感情の活性化を計り、子供たちの知的好奇心を高め、生徒に生徒自身の言葉と音声を発見させることに努める。発見学校2年間のカリキュラムに見られるように、子供たちの思考訓練に大きな比重がかけられている。これは取りも直さず、主語なしの「ほんわかとした雰囲気」を持つ日本語から、自他を明確に区別する英語を習得させるための基本的思考の原理を、子供たちの中に育てようと意図したものである。自他の明確な区別は、「私は私であり、あなたはあなたである」という考え方につながり、あくまでも個人の主体性を尊重するという考え方につながるのである。ここに発見学校の根ざす理念があったのである。

発見学校的教師は実に良く生徒に辞書を使わせる。現

行英語教育の中では一種タブー視されている和英辞書も使わせる。例えば絵から言葉を見つけさせる作業をさせるが、単に絵を表面的にとらえた語のみでなく、絵にある人物の内面的描写に触れる語まで子供たちは引き出して来る。教師はそれらの語に音声を与え、文を作る作業を通して子供たちの見いだした語に生命を吹き込む。そこに全體的英語学習が見ごとに示されていることを読者は理解できるであろう。でき上った文は更に日本語と対比させる。それは、あくまでも同一事実の記述になされる2つの言語の相違を認識させる事をねらい、決して一対一的対応として両言語をとらえることをさせない。従って両言語の单なる置き換え作業は与えないことに注意する必要がある。指導の最初から「言葉」を訳すのではなく「場面」を訳すという通訳の原理が、著者の指導理論の中に生かされているのを見るのである。

最後に日本が将来国際社会の中で生き抜いて行くための手立てとして英語教育の必要性を強調している。そのためには今の英語教育ではどうにもならないという著者の絶叫に近い訴えがある。外国からの直輸入的英語教育を戒め、母国語の概念形成もおぼつかない幼児に対する英語教育を警告し、現在の学校教育の中にある英語教育を「何とかしてくれ」という。これから子供たちには、国際社会で生きのびて行ける智恵と技術と心がまえと人間性を養う教育を与えるべきであるとする著者の提言は、教育に携わる者すべて耳を傾ける必要があるようと思われる。大宅賞を得た今ではこの書は多くの人に読まれるであろうが評者はとりわけ小中高の教師、教える教科と関係なくすべての教師に読むことを薦めたい。方法主義的教育論に低迷する英語教育界に、思考の革命を要求しているように見える。教師のみならず子供の教育について少なくとも関心を持つ人のすべてに必読の書として薦めたい。

然しながら著者の要望する教育は中高の英語科を著者のいう国際社会科としても解決できるかという疑問は残る。英語教育の問題は、英語教育という枠の中だけで解決できる問題ではないのではないか。ことばと認識、ことばと新しい概念形成、ことばと創造のつながりを全教科の土台として、ことばと教育という教育の根元的問題に立ちかえって教育の問題を考えなおさねば、混乱した教育の中で英語科だけがスケープゴート的に取り扱われる不当性が増大する心配がある。そしてまたこのような流れが時代逆行的英語教育無用論に結びつけられる風潮がもうそろそろ広がりつつあるのではないかという危惧を持つのは評者だけではあるまい。

(ELEC 研修第二部長)

『マザー・グースの世界』

—伝承童謡の周辺

平野敬一著, ELEC, B6判, 180 pp., ¥780

KUNIHIRO MASAO
國 弘 正 雄

本書を評するにあたり、ぼくは一人のアメリカの文芸学者の造語2つを枕に、一人の日本の英文学者の発言を結びにしたい。前者は中欧生れで、現在はイエイル大学のウェレック教授、後者は福原麟太郎教授、何れもぼくの尊敬してやまない現代の碩学である。

ウェレック教授は、学問、とくに文芸に関する学問を、*extrinsic scholarship* と *intrinsic scholarship* の2つに大別する。同教授の説をぼくが正しく理会しているとすれば、外在的学問とは、ある文学作品なり作家に関する詳細をきわめた調査を指す。本文批評などはその中心をなすであろうし、ときにはエドガー・A・ボウが、ボルティモアの何という洗濯屋で、いつどんな洗濯物を頼んだかを、受けとり証から再構築してみせる、という形をとる。それは当然のことながら、博引旁証をともない、いわゆるアカデミックなにおいを撒く。瑣末主義と批判する向きもある。

他方、内在的学問とは、黒川真頼だったか明治時代のある国文学教授がそうであったと伝えられるように、一篇の作品を朗々音誦、ああいいですなあ、と三歎これ久しいうしておわるという形をとる。狭義のアカデミズムとはほど遠いが、文芸とはしょせんこのような形式においてしか、味読し評価できぬのかも知れない。

どちらが秀れているかの優劣論は意味がない。ただ前者に傾斜しすぎると、トリのガラのように味もそっけもない考証学におわり、本居宣長のいわゆる「こちたきさかしら」に堕してしまう。ドイツの学問や、その流れをくむアメリカの学風に、この傾向が強い。他方、後者は大家の筆や口から発せられたときは、芳醇なブランディの味にも似た深みと味わいをもたらす。イギリスの碩学の書きものにはこの好ましい豊かさがよくみられる。ただ、虎を描いて狗に似る危険は、ぼくのような小家には避けられない。自然科学用語を借りるなら、前者を定量的、後者を定性的と呼ぶこともできよう。

本書ほど、この両者がみごとにミックスされた著作を、ぼくはあまり知らない。大体、マザー・グースとい

う主題を選びとったこと自体が、著者の文芸、いや人間のいとなみに対する内在的な愛情を示すものであろう。外在的な学問の追求のみを志す学者先生にとって、マザー・グースはあまりにも日常性と卑俗性に富み、アカデミックな食欲を湧かすに足るとは思えぬからである。しかしそこには英米人のエトスが浪打っており、英語や英文学の基礎がデンと腰を据えている。マザー・グースの初步的な理解なしに、英語国民の生活意識や哀歎はおろか、言葉遣いですらが十分に把握できようはずはない。

とはいえる、本書には著者の長年にわたるアカデミックな研鑽の一端が隨所にみられる。よくもここまで詳しく調べてこられたものと、ただただ脱帽するばかりである。研究書も比較的少ないであろうし、外在的な研究には一入のご苦勞があったと想像されるのである。あまりにも日常茶飯にすぎて、本国の事典や辞書のたぐいも、とかくやりすごしがちだ、とは、著者がくりかえし指摘するところである。仮りに日本語や日本文学を研究する外国人が、「桃太郎さん桃太郎さん、お腰につけたきびだんご、一つ私に下さいな」という童謡を知らぬままに、日大闘争時の「古田さん古田さん、お腰につけたゼニ袋」という学生側のスローガンに触れたとしよう。彼にはそのスローガンの由つて来る所以は判らぬであろうし、よしんば心利きたる外国人が気づいたとしても、その調査を容易にしてくれるような外在的研究書は残念ながら存在しない。同じことが、英語を学ぶわれわれにもいえはすまい。そして、著者はその苦勞を自らも経つつ、中央公論社刊の前書『マザー・グースの唄』につづく、この労作を世に問うたのである。われわれ英学生の深い感謝に値する所を述べても、決して過褒とはいえない。

このことは福原教授の名言をぼくに思いおこさせる。「英語を読むことが一番むずかしく、話すことが一番易しい」という名言をである。本書は読むことが一番易しいという俗説に反して、それがどれほど至難なわざである。

るかを痛いほど教えてくれる。少なくともぼくはそうだった。タイムやニューズウイークなどの一般週刊誌の見出しや、なんの事もない書名——たとえばウォーターゲートを扱った *All the President's Men*——ですらが、どれほどマザー・グースに負っているかを知られ、いま頭をかかえているところである。「英語は読める、などとは露申すまじ」というのが実感である。

さいごに著者について一言。日本の数多い英文学者の中で、平野敬一教授は、英文を書き話すといふいわゆる実用面でも、群を抜いた名手である。本国——カナダ——の大学で英文作法を講じられた経験が、このことを雄弁に物語っている。その実力は、ぼくを含むいかないでの英語実務家や、実用英語の専門家の比ではない。その彼が、日本の大学英語教師について、「かんなの使い方もあるやしこそに、建築理論ばかりをふりまわす」というとき、その発言には重みがある。しかも、カナダ文学研究の第一人者としても著名であり、生きた英語が駆使でき、外在的な学問を十分に身につけた著者がこんどは人の営みに対する切々たる愛情をこめて物したのが本書である。一読、あまりにも多くを教えられて、いささか呆然気味のぼくが本書を推す理由もここに存する。

(p.33 からつづき)

意味上異なる所のある叙実述語、非叙実述語は、また統語論上にも色々異なる点があることを指摘し、それを説明するために、叙実述語に対してその補文のあたまに *the fact* という名詞句を深層で仮定することを提案したのは Kiparsky-Kiparsky (1970) である。これは非常に面白い提案であり、事実叙実述語は表層でも *the fact* を補文のあたまに許すものが多いが、非叙実述語はそうでない。たとえば (4a) の *that* 節の前に *the fact* をつけてもよいが、(5a) の *that* 節の前に *the fact* をつけるとおかしくなる。同様に (9a) の *that* 節の前に *the fact* をつけてもよいが、(10a) の *that* 節の前に *the fact* をつけるとおかしくなる。

しかし Kiparsky-Kiparsky の仮説の味噌は、表層で *the fact* が許されるか否かということよりも、叙実述語に対し深層で *the fact* を仮定することにより、叙実、非叙実の間の色々の統語論上の相異がより統一的に説明できるという点にあるのだが、この問題は省略する。

引用文献

- Emonds, Joseph E. 1970. "Root and structure-preserving transformations." Reproduced by Indiana Univ. Linguistics Club.
Kiparsky, Paul, and Carol Kiparsky. 1970. "Fact." *Progress in Linguistics* (ed. by M. Bierwisch and K. H. Heidolph. The Hague : Mouton), 143—73.



新刊紹介

『グラマー』

フランク・パーマー著
高橋 久訳注

「文法理論入門」と副題があるように、これは初学者に対して、今までの文法理論の発展を解説したものであり、その意味では要領よくまとまった仕事ということができる。

第一章 「単一の文法と複数の文法」では、「文法」というものの基本的な考え方を、説いている。特に、文法範疇は、本質的に意味論・音韻論とは区別して考えるべきだという立場から、格、語順、性等を論理の軸に、さまざまな俗説的な従来の文法観の問題点を説き明かそうとしている。

第二章 「伝統文法の考え方」で、Nesfield 等の規範文法的考え方に入れる。結局、文法範疇が觀念的な用語で定義されていること、又、ラテン語の分類を無理にあてはめていることが本質的な問題の所在であるとし、その非文法的な態度が結果するさまざまな矛盾、不完全さを詳述している。

第三章 「構造言語学」。完全に経験的、科学的でないとする願いから唱導され、開発され、隆盛を極めたこの学派も、今や本質的な弱点を露呈しているとする、I C 分析は、文の分析についての構造言語学者の解答であるが、結局、旧來の文法知識によりかかった矛盾を含み、行き詰まっていると見る。

第四章 「変形生成文法」。文のあいまい性をよりよく解決すること、実在の文のみならず、可能な文に關係しえること、その他、従来の文法理論の欠陥をかなり埋めうる可能性をもつ革命的理論として、高く評価しながら、native speaker の intuition を文法知識の証拠の一部と考える態度その他に疑問を提出している。

百家争鳴の言語学理論を、以上の4つの章で概説しながら、著者の立場をじっくりと主張した好著で、訳業も真剣である。(文化評論出版250pp., 2,200円)

(田村 泉)



◆第10回 ELEC 英語教育研究大会

第10回目を迎えたELEC英語教育研究大会はつぎの通り開催される。

期日 11月2日（土）午前10時～午後6時

場所 ELEC会館（千代田区神田神保町3-8）

〈午前の部〉

講演 "Semantic Constraints as a Problem in (English) Language Teaching"

Dr. Noah S. Brannen, I. C. U.

講演 「現在および将来の英語教育」

東京外語大名誉教授 小川芳男氏

ELEC賞授与式・ELEC同友会総会

〈午後の部〉

実演授業 北区立王子中学校1年生

指導者 同上校教諭 飯塚基央氏

専門分科会

◆第1回 ELEC 特別講座

8月3日に「外国语教育の現状と改革の方向」というテーマで、パネルディスカッションと公開討論の会をELEC会館において開催した。司会は、朱牟田夏雄氏（中央大学教授）が、パネリストには平泉涉（参議院議員）、國弘正雄（国際商科大学教授）、中津燎子（大宅壮一賞受賞者）、下村勇三郎（学芸大付属竹早中学校教諭）の諸氏が当たり、230名の参加者とともに3時間以上にわたって、非常に有意義な討論が行なわれた。

参加者からの強い希望により、同じテーマによる「パネルディスカッションと公開討論会」を10月26日（土）の午後、ELEC会館で行なう予定にしている。

◆ELEC 同友会月例研究会

月例研究会はELEC会館を会場にして開催されているが、10月の予定はつぎの通りである。

第75回 10月19日（土）2:30～4:30

"Some Problem Spots for English Learners"

Prof. Wallace Smith, Seikei University

◆TOEFL の実施

TOEFL (The Test of English as a Foreign Language) は、アメリカの大学に入学を希望するほとんど

すべての者に課せられる英語能力検定試験であるが、今年度は11月25日（月）、2月24日（月）にELEC会館で実施される。この試験を受けたい方は、それぞれ10月14日、1月13日までにTest of English as a Foreign Language (Box 899, Princeton, New Jersey, 08540 U.S.A.)に申し込まれたい。

なお、このTOEFLの模擬テストを11月13日（水）、11月22日（金）、2月12日（水）、2月21日（金）の午後1時からELECで実施する。

また、ELEC英語研修所の「TOEFL受験科」はつぎのとおり実施される。

第4期 11月12日（火）～12月19日（木）

第5期 1月14日（火）～2月25日（火）

第6期 2月27日（木）～4月10日（木）

◆English Teaching Forum の頒布

ELECでは世界の英語教育専門誌 *English Teaching Forum* (USIA発行) の配布を行なっております。講読を希望される方はELEC出版部宛お申し込み下さい。講読料は年額1,200円（含送料）。

〈編集後記〉

△韓国で日本の国旗がひきちぎられたり、日本人に対して不売運動が起きているという新聞記事を読んだりすると、長い間眠り続けていたナショナリズムが突然ムラムラと甦ってくるのは一体どうしたことなのだろうか。

△国際感覚の体得の必要性が叫ばれ、それに関する書物も多く出されているが、一般に、国際感覚の欠如という場合に、対アメリカであったり、対ヨーロッパであったりはするが、対東南アジア、対韓国、または対中国といったらえかたはしていなかったのではないか。世界の中の日本という立場で、国際感覚と国際的視野をもう一度考えなおさなければならないと痛感するこのごろである。

(Q.Q.)

英語展望 (ELEC Bulletin)

第47号

定価 430円 (送料70円)

昭和49年11月1日 発行

◎編集人 中島文雄

発行人 竹内俊一

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1の12

電話 (266) 2111 (案内台)

発行所 ELEC (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (265) 8911～8916

振替 東京 11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC